
孤高の戦士

砂漠の蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤高の戦士

【Nコード】

N0528M

【作者名】

砂漠の蜻蛉

【あらすじ】

ナーリアの戦いから四ヶ月。傷跡を残しながらも何時も通りの生活に戻りつつあった同盟国に、皇王宣言が出された。

一方、ルークは拉致されたランクを救出すべく、一人ホーエイムに乗り込む。

登場人物（前書き）

戦う者は三種類いる。

一つ目は、それ自体を目的としている者。

二つ目は、何かの代償のため。

三つ目は、目的の途中で戦いがあるため。

登場人物

ルーク

フライゴン 用心棒 ホーエイムに乗り込む

ガレン王国

大陸西部の比較的小さな国

ランク

リオル ガレン王国王子

ガル

ボスゴドラ ガレン王国将軍

シュロ王国

大陸西部の軍事国

アル

グラエナ 獵犬のリーダー シュロ軍第二部隊隊長

カトラル王国

大陸中央部の砂漠地帯に存在する国 同盟国の中で最も大きい

ラーク・セレン

フライゴン カトラル王国国王

カトラル七氏族

カトラル各地を納める領主

ナーリア王国

大陸最南端にある海洋国家 海上の真珠とも言われている

タンナル

オーダイル ナーリア王国国王

カイナル

アリゲイツ ナーリア王国第一軍隊長

シュラー

デンリユウ バイル島に住んでいた凄腕船乗り

カミア

シャワーズ シュラーの友人 船に弱い

サス貴国

二つの貴族で、国を治めている貴族性の国家

ハミネ・ハイラルソール

エネコロロ 二人いるサス貴国を納める一人

ナナ・タイカーナン

トゲチツス 二人いるサス貴国を納める一人

ホーエイム皇国^{ホーエイム}

ナーリアの南にある国 同盟国に対し皇王宣言を出す

1話 皇王宣言（前書き）

孤高の戦士始動です！

ちなみに孤高はフォックさんの昔の感想から頂きました。

1話 皇王宣言

ナーリア・ホーエイムの開戦から、四ヶ月が経った。

ナーリアは何とか、ホーエイム軍を退却させた。事実上の勝利だ。だが、戦場となつてしまったナーリア領 バイル島は多大な被害を受け、ナーリア国家は一時期、著しく弱つてしまった。

しかし、ランクの考案した、同盟（以降 王国同盟）により、何とか回復し今に至っている。

ナーリアは、傷跡を残しながらも、元の平和な国に戻りつつあった。

場は変わり、カトラル王国、カトラル城。

国王ラークは、窓枠に腕を置きながら外を眺めていた。

ホーエイムがああの程度で諦めるわけが無い。と一人考えていた。

「国王様。リアムです。」

ノックする音がして、聞き取りやすい声が聞こえてきた。

ラークは入室を許可すると、青ジェット機のようなポケモン。ラティオスが入ってきた。彼は、少し前の事件の時からカトラル城で働くようになった。

「そんな堅苦しくしなくても良いよ。」

「いえ、仕事中は。怒られてしまいますので。それより、国王宛に、

文が届いたのですが。」

そう言つて、リアムは、丸められ、紐で結んである紙を手渡した。紐は、一般庶民では、到底手にする事が出来ない代物だ。

よく見ると、十字架に蛇が絡みついているホーエイム皇国の国旗が描かれていた。

ラークはリアムの顔を見た。

「これは？」

「先程、届いた物です。」

ラークは、紐を解き紙を広げた。

ラークの目に、あつてはならない言葉が映つた。

「リアム。」

「はい。」

「全ての、領主に緊急で招集をかけてくれ。」

「えっ。ですが、先程発たれたばかりで……。」

「だったら今すぐ呼び戻せ！」

ラークの怒鳴り声に、一瞬リアムが怯んだが、リアムは直ぐに部屋を飛び出して行つた。

暫くして、五人、全員が集まった。セレンとジャータは、未だに欠落しているので、そこは空席になっている。

「ラーク様、何があっただんですか？」

トロピウスのユシール・リーンが訊く。

ラークは無言で、リアムが持ってきた手紙を渡した。

ユシールが、それを開いて読み上げる。

「『皇王宣言』 我は、神の元、皇王を唯一の王とする。従わぬならば、制裁を与える。』」

ユシールは勿論、五人全員が顔を上げ、ラークに向いた。

「これは、宣戦布告じゃないか！」

「ファラルス。黙れ。」

「こんな横暴な事があるか！ 国王、如何するんですか！」

ファラルスが、手を机に叩きつけた。

「……交渉には応じないだろうな。」

ラークの独り言で、部屋が静まり返った。

「仕方ない。ケルト。」

「はい。」

「すぐに戻って第一、第二分隊に準備させる。ナーリアまで行けるだけで良い。着いて、ナーリアの出方を見よう。もし援軍が必要ならば、ナーリアに加われ。その時は、伝兵に手紙でも渡して此方へ送れ。」

「はい。」

「他は、それぞれ戻って、準備だ。連絡が着き次第、すぐに発つ。行けっ！」

暫くして誰も居なくなつた部屋をラークは見回した。

我ながら、自分の言つた事が恐ろしい。

外には、カトラルには珍しく黒く重たい雲が立ち込めていた。

2話 開戦（前書き）

長い間、筆記をサボっていた上に千文字いかなかった……。

ルーク「文章力の無い奴だ。」

2話 開戦

「おい。早く仕度をしろ。奴らをこの国に入れるな。」

カイナルは、ホーエイムの突然の宣戦布告に戸惑ったが、すぐに指示を与え、戦いに備えていた。

「出港はまだか！」

カイナルが不機嫌そうに声を荒げた。

「出港するなら、我々も乗せていってもらおう。」

振り向くと、アブソルが立っていた。防具を着けている。

「アンタ、カトラルの……。」

「ケルト・ユーナ。ユーナ氏族の長だ。我々も乗せていってもらおう。」

さっきと同じことをケルトは繰り返した。

「これは、俺達の戦いだ！」

「それがそういう訳にはいかない。」

そう言うと、ケルトは、丸められた紙を投げた。それは、殆どぶれずに、カイナルの手に収まった。

「何だよ。」

「開け。」

簡単な言葉で、会話を終わらせると、ケルトは、部下達に向かって何か指示を出した。

カイナルは、手渡されたそれを開く。

「分かっただろう。」

「分かった。一番右の船ならまだそれだけ乗れる。」

ケルトは頷くと、部下を連れて、行ってしまった。

「くそっ！」

カイナルは、地面を思いっきり蹴った。

少し固まっていた塩が、剥がれて散らばった。

「何が目的なんだ。あいつ等。」

カイナルは、水平線の向こうにある筈の大陸を睨んだ。

サス貴国は、カトラルの南にある。東は断崖絶壁になっており、交流は殆どカトラルだけになっている。

何故なら、サス貴国は、もともと、ガレン王国から分離して出来た国だからだ。

その時に、先陣を切って戦った二つの貴族が今のハミネとナナの先祖だ。

「ハミネ様。このような物が。」

ハイラルソール家の使いが、ハミネに紙を手渡す。内容は、やはり皇王宣言だ。

「ハミネ。どうかしたの？」

ナナの声が、空気を和ませる。

「ナナ。ホーエイムが仕掛けてきたわ。」

ハミネは関心が無いように素っ気なく答えた。

「国を護るわ。」

「ハミネに任せる。」

その言葉を待っていた様にハミネはゆるりと立ち上がった。

「援軍を出しなさい。明日の明け方、全軍を出し友軍ホーエイムに加勢しなさい。」

静かに言い放った言葉の重みは十分分かっていて。だが、今この国には強大な勢力と戦うだけの力はない。それはハミネ達が一番分かっている事だった。

各国は、眠れない夜を過ごした。

3話 ランク失す

ホーエイム皇国は、ナーリア王国の南にある大陸の三分の一を占める大国だ。

その中で、最も北に位置する陣営は、石の城壁が永遠と続き攻め入る事を赦さない。

「申し上げます。ナーリアへ、送ったリンナから、ナーリア、カトラル、シュロの軍が出港したとの事です。」

「そうか。馬鹿な者達だ。」

地図が広げてある台の方を向いて座っているポケモンが言った。

「もう、二つあたし達の手中なのにな。」

ナーリアの国旗が描かれている旗の模型を弄もてあそびながら、もう一人も言った。

「大体、なんであたしが居ないといけないのよ。こんなの、あんたが考えれば良いじゃない。」

二回目に口を開いたポケモンが、赤いポケモンに文句を言う。

言われた方は、持っていた模型を取り上げると、カトラル、シュロの模型と一緒に蝋燭の火に近付けた。模型は、一瞬で火がつき、燃え上がった。

「たわけ。貴様も、こうしたいんだろ。」

火のついた旗の模型を床に落とすと、それを踏み付けた。

模型は、ジュッ　と音を立て粉々になった。

「まあね。」

「おい。行くぞ。敵は、全て片付ける。」

「分かったわよ。」

そう言つて、二人は立ち上がった。

「そういえば、ザクマは何処？」

「奴は、会議を無視して寝ている。」

「たつくあいつは、叩き起こしてやるわ。」

「放っておけ。それより、船を準備しろ。」

「はいはい、ヴィン。」

二人は、部屋を出て行った。

ガレン王国も、やはり混乱していた。

理由は、皇王宣言しかない。

だが、この国もやはり自分から国を捨てる事は出来なかった。

「全軍、準備が出来次第、待機しろ。指示があるまで動くな。」

ガルは、適等な指示を出す人と人捜しを再会した。

捜しているのは、リーフ。かつて、ランクを護るために共に戦った仲間だ。だが、つい先日、突然姿を消した。

「何をしているんだ、あいつは。」

ガルは、色々な怒りをまとめて床に叩き付けた。

ランクは、一人、部屋に籠っていた。

理由は、ナーリアでの出来事だ。

あの時は深く考えなかったが、自分達の部下が、自分の作戦で傷を負ったのだ。後から来た情報によると、敵側に死者も出たらしい。例え敵でも、自分が手を下していなくても、自分が殺したのと同じ事だ。

そしてこの皇王宣言、これも自分が蒔いた種から芽生えてしまった物の様に感じる。

そう考えると、夜も眠れない。ガルやルークは、何時もこんな気持ちなんだろうか。

「はあ。やっぱり、僕は、王様にむいてないのかな。」

「そんな事はありませんよ。これから貴方は、十分役立ちます。」

ビクツとした。ハランも入れていないし、第一ハランの声じゃない。

「誰だ……っ。」

唐突に後ろから布で口を覆われ、体の力が抜け崩れ落ちた。

「流石、天才、毒使い。」

もう一人、別の声がした。すると、窓の外から、身軽に赤い毛に覆われたポケモンが滑り込んできた。

「その呼び方をするな。」

その声に、今、気が付いた。この声の主は……。

「何故……。」

その言葉を最後に、ランクは眠りの闇に吸い込まれていった。

「王子、我々と一緒に来て頂きましょう。」

最後にそう聞こえた気がした。

4話 発つ

ガレン王国の王都、ヒビンのすぐ東にある深い森。

そこにシグラの家があった。

普段、シグラは、街へ、下りて行ったり、近くの村に薬草を売りに行ったりしているが、今日は違った。

「ルーク！」

シグラには珍しく、乱暴に扉を開け、がたがきていた扉が外れそうになった。

「どうした。」

「どうした、じゃない！ ランクがいなくなった……。この国は実質上の鎖国だ。」

「なに？」

ルークはため息をついた。

「暫く、足止めか。」

そして、興味がなさそうに、外を見た。

「シグラ、客だぞ。」

そう言われて、シグラは外を見た。
確かに、人影が見える。

それは、近付くにつれてルカリオの形になった。

「あっ！」

シグラは外に出た。

「お妃様……？」

「お前は、確か……。ええい、この際誰でも良い。ルークは何処へ行った。」

「ルークなら、中に。」

「分かった。」

かなり焦っている様子で、妃はササツと中に入ってしまった。

「お久しぶりです。シグラ、奥の部屋、貸してくれ。」

ルークは大して反応せず。奥の部屋に妃を連れて入ると、中から門を掛けてしまった。

門をかけたルークは、壁にもたれかかった。

「今度は何です。」

「ホーエームに行つて欲しい。」

彼女は単刀直入に言った。

「そして、ランクを連れ戻して欲しい。」

「……。」

ルークは黙つたままだ。

「王子を人質にされては、軍も動かす事は出来ん。お前しにか頼める者は居らん。」

「私に、戦場へ行けとおっしゃるんですか。」

「そうだ。ナーリアにシュラーと言つデンリュウの船乗りが居る。そいつがホーエームまで乗せていく。」

ルークは壁を離れて、妃の前に立った。そして冷たく言い放った。

「行きません。」

「何故だ！ 報酬ならいくらでも出す！」

「そんなもの要りませんよ。貴女は私を自由に動かせると思つてくれるようですがね。」

ルークは妃の目を見た。怒りと、絶望が入り混じった目をしてい

る。

「何故だ……。前は、引き受けたはずだ……。今更、何故……。」

「前の仕事は、ランクを護る一環でしたから。契約後に浚われたなら私の責任だが、その前に浚われたのは、貴女方の責任だ。そういう仕事は傭兵に頼むんですね。」

ルークは、氷柱を落とすように言った。見ると妃の手から血が流れている。強く握りすぎて爪が食い込んだのだろう。

「帰って下さい。」

ルークはそう言って門を外した。

「波動弾！」

ルークは、後ろから飛んで来た波動弾を、左手だけで、消し飛ばした。

「最後に言っておきます。私が何をするかは私自身が決める。」

妃を送り出した後、今度はシグラが突っ掛かってきた。

「何で！ ルーク。お前、ランクを見捨てる気か！」

「……。」

ルークはシグラを無視して、荷物をあさりだした。
そして何か茶色い、袋を取り出した。

「行つて来る。」

そう言い残して、ルークは出て行つた。

「おい、死に行く気じゃろ。」

外に出ると、暗く湿度の高い空気の中にサガル師が立っていた。

「サガル師。聞いていたんですか。」

「何故そこまでする。」

ルークは少し間を空けて、「貴女が一番よく知っている。」と小声で言つた。

「死んだら、わしが地獄の底に突き落としてやる。」

「楽しみにしてます。そんな場所が存在するんですかね。」

そう言いながら、海のほうを向いた。

「シグラに謝っておいて下さい。」

「ふん。自分で言え。」

その答えを聞くと、ルークは飛び去っていった。

5話 前哨戦

ナーリア領、バイル島はホーエイムとのほぼ中間地点にあり、最も戦場になりやすい。この戦いを有利にする為には、まず、この島を抑えたほうが有利だ。

その点に関しては、カトラルのユーナ隊が活躍した。ユーナ隊は、特攻隊。つまり、真つ先に戦場へ出向き、自軍の戦術を展開できる場所を確保する。

ユーナ隊は、お得意の奇襲戦で、島に送られていたホーエイム軍を殲滅させた。

お陰で、連合軍は、島の北側、全てを自陣とした。

そこで次の策は、ホーエイム軍を徹底的に追い詰める為の奇襲策に出た。

リン隊とアルが率いている第二部隊が、既に出ている。二隊とも隠密性に優れた部隊なので、音も立てずに東側にある森を進軍していた。

「何故こんな事になるんだろう。」

ユシールが、呟いた。

「戦いなど、どちらから始めても、両者が悪にしかないのに。戦争は、嫌いだ。」

アルはユシールを睨んだ。

「とても、軍を率いている者の言葉とは思えないな。戦いは必ず起こる。この世に、力がある限りな。」

紛れもない事実。それは、アル自身が一番よく分かっているつもりでいた。力の有る者は支配者となり、弱者は死に絶える。それがアルにとって天が天であり大地が大地であるくらい普通の事だった。アルは、落ちた枝を踏み音を立てそうになった。

「アンタ、家族はいるのか？」

ユシールが自分の事か？と目で訊ねてきたので頷いた。

「いるさ。息子が一人に、娘が二人。」

「俺も同じだ。……今度、会わせてくれ。」

今度、会わせてくれ。心の中で自分の言ったことを復唱した。そんな約束果たせるわけ……

「果たせるわけ無いだろ。」

二人は、突然の声に一瞬硬直した。そして、上を見た。空からは、嘲笑うような笑い声が、響いていた。

「久しぶりだな〜！ グルラニ・ジェヴ・アグゼラ。」

アルは、目を見開いた。何故その名を知っている。

「先に行け。俺がやる。部下は任せた。」

言い捨て、アルは、大気の臭いを嗅ぐと、ユシールの静止も聞かずに薄暗い森の中に飛び込んで行った。

速い。森を吹き抜ける風の様だ。こんな偉業を成し遂げられるのはジユカインやジユプトルの他にあいっしか知らない。

「何処だ！ 出て来い！」

「そう急かすなよっ。」

何か来る。直感したアルは頭を下げた。その上を、風が通り抜けていった。

「賢明な判断だね。避けなかったら君の首は、今頃俺の足元だ。」

アルはそれには答えず。そいつを睨みつけた。

「さて聞くが、俺が憎いか。」

さっきまでとは違い、言葉に殺気が滲み出ていた。殺気だけで気圧されそうだ。

「黙れ、ギリス。」

アルは、木々の影から出て来た。ガラガラを再び睨みつけた。

6話 ユシールの力（前書き）

今回は、ちょっと頑張りました！

アル「頑張ったといっても1300字だろ。」

しゅん

6話 ユシールの力

アルはギリスを睨みつけたまま、動こうとしなかった。

こいつは強い。だが、それは過去の話だ。今はほぼ互角、均衡状態を保っていれば……

「俺を覚えていたとは、よほどの物好きだな。俺に負けたからか？
それとも、」

ギリスが消えた。

「貴様の親を殺されたからか？」

背後から、鋭い骨が襲い掛かってきた。
ギリスはクククと笑った。

「クッ……。」

目の上を切られた。

血が目に入って右目が使い物にならなくなった。
だが、それとは別に怒りも込み上げた。

俺の本当の名は、グルラニ・ジェヴ・アグゼラ。奴、ギリスは俺の親を殺した。それも、自分の目の前で。

「貴様だけは、許さない……。」

アルは、牙をむいた。

「ククク。君の大好きな父親のところに送って……」

「黙れ！」

アルは一気に間合いを詰め、シャドークローを耳に喰らわせた。

「ククク。変わってないな。」

しまった！ 虚像だ！

気づいた時には、脇腹に激痛が走った。

「グ……。」

シャドークローは、届く前に弾かれ力が分散された。

アルは、ギリスの振り上げた骨に胸を殴られ、嫌な音と共に後ろ向きに飛ばされた。

「ガハッ！」

アルは木に叩き付けられ、血を吐いた。

ギリスには傷一つ付けられず、逆に、自分に傷が増えた。

やはり、親を超える事は無理なのか……。親の敵^{かたき}すら、取れないのか……。

ギリスは、殆ど動かないアルに近づいて行った。

「こいつも、所詮この程度か。つまらん。お前の親は、楽しかったんだがな。」

ギリスは、アルの首を掴んだ。

「お前の親は馬鹿だったが、断欠魔は聞き応えがあったな。お前の犠牲になった時の声がな！」

ギリスは、アルの首を締め上げるように腕に力を込めていく。

「く、くそ……。」

「きまつか狂花式、かじやくせんば花雀尖剣！」

刹那、頭上から鋭い葉が、降り注いだ。

ギリスは、飛び下がり、攻撃の主を捜した。

「アル、約束は守ってもらう。狂花一式、つたがらす鳶鴉。」

上から降りてきたユシールは、着地する寸前に減速し、静かに足をつけた。

「くそつ　誰だ！」

ギリスが地面から伸びて来る鳶と戦っていた。
だが、鳶は徐々にギリスに巻き付いて、動きを制限していく。

「無駄だ。狂花終式、くるはごうしき狂花。」

ユシールが、背中 of 葉を大きく動かすと、鳶から、白い花が咲き始めた。ギリスは、逃れようとしているが、鳶が外れる気配は無い。その間にユシールは、アルを起こしあげた。

「さて、作戦を放棄した理由^{わけ}初めから話して貰^{もら}うぞ。」

「馬鹿、俺の、敵だ……。」

「生憎、そんな礼儀は持ち合わせていないのでね。狂花^{くるこはな}は体力と、技を出す力を強制的に奪う。花が散るころには命は、」

ユシールが、振り向いた。

「馬鹿な……。破られるわけ。」

見ると、ギリスが力尽くで鳶を引き裂こうとしている。鳶は、耐え切れずに、千切れ落ちた。

「ゆるさねえ。貴様らぶち殺してやる」

ギリスの声は怒りに震えている。傷が殆ど無い。

「破壊光線！」

「狂花零式、枝垂花！」

ギリスの放った破壊光線は、ユシールの作り出した草の防壁に弾かれた。

アルは、すぐさまギリスの後ろへ周りこみ、怒りの前歯で、噛み付こうとしたが、ギリスの骨に阻まれてしまった。

アルは、振り落とされたが、上手く着地して、ユシールの元へ駆け込んだ。

傷口が傷む。

「おい。」

息を切らしながら言った。

「俺が戻ってくるまで、もつか？」

「もたせて見せる。」

ユシールが真面目に答えたので、アルは苦笑いを浮かべた。

「頼むぞ。」

7話 打開策（前書き）

やっと更新できました！

アル「遅い。何時まで待たせるつもりでいたんだ。」

だって、模試とか漢検とかで忙しかったんだもん。

7話 打開策

俺はまだ、軍に入っただけのヒヨコ子だった。

父親は、強さでいう二番目の隊を仕切っていたが、裏では、猟犬のトップとして王の影として働いていた。

末っ子だった俺は、五つの時から、夜中に駆り出され音の立てない走り方や、急所、暗殺の仕方まで、細かく鍛えられた。

訓練は夜中まで続けられ、終わる頃には、全身傷だらけで横になつたらずに眠りについてしまうほどだった。

それでも、朝は、兄達と同じ時間に起こされていた。

母親は、寝起きが悪い。と、言っていた気がする。

そんな事を考えながら、アルは自分の荷物を探していた。

あいつの事だ、部下に運ばせて置いた俺の荷物をこの近くに隠せとでも言っておいただろう。

「あつた。」

アルは、近くの茂みから、銀色に光る物を探しあてた。これが無いと危険すぎて扱えない。

「あいつ、ちゃんとやってるんだろうな。」

「待て待て待て。危ないって!」

その頃、ユシールは次々と飛んで来るホネブーメランを避け続けた。

「黙れ！　これから死ぬ奴が、そんな事気にしなくていい！」

「優柔不断な奴……。殺さないように戦うの、難しいんだよ。」

ユシールは背中の葉を広げた。

「舞花、第三曲。漣。さざなみ」

リーフストームを打ち出し、ギリスの周りに葉の刃の壁を造った。

「さて、こういう、拷問じみた事はあんまりやりたくないんだけどさ。アルとの関係、教えてくれる？」

「こんな物……。」

ギリスが、ホネブーメランで回転する葉を叩き落そうとしたが、逆にホネに傷が付いた。

「……。アンタ、さっきまでは何処いったんだよ。」

ユシールは飄々と言った。

「ん〜？　ああ、あれは誰かいると緊張しちゃってさ。ついあなっっちゃうんだよね。」

ユシールは、右にある葉を大きく動かした。それと連動して、ギ

リスの周りを回っている葉がギリスに襲い掛かった。

「おい。何処を見ている。」

痛みと共に、ギリスの声が響いた。足元には、何故か、赤い鮮血が水溜りをつくっている。

「な……。漣を……。」

声を発する度に、胸に痛みが走る。息が苦しい。見ると、鋭いホネが胸の辺りを貫いていた。

「何時の間に……。」

「貴様の問いには答えん。」

ユシールは、その場に倒れこんだ。

「間に合わなかったか……。」

ユシールはぼやける視界から、銀色の塊を見た。徐々に視界が安定していく。やがて、それは甲冑を着込んだアルの姿になった。

甲冑は動き易いように一枚一枚の部品の間隙に隙間がありている。その隙間からは、鉄の糸で出来ている薄い布を巻いているのが見える。顔は、頭から鼻先まで一枚の板でつながり耳から横はそのまま見える様になっている。そして、脚には何故か、鋼鉄製の輪を着けている。

「何なんだ……。その姿は。」

甘く見積もっても100kg以上はある。これでは、動く事なんてままならない。

「ギリス。俺は貴様を許さない。」

「そんな姿で、一体如何しようと?」

「こうするんだ。」

アルは足を少し広げて、重心を下げた。

「ダーク・ウルビア!」

アルの目の前に集まっていた、エネルギーが、一直線にギリスに向かっていった。

衝撃で、木々が根ごと外側へ吹き飛ばされ、辺りに土煙が舞い上がった。

8話 ダーク・ウルビア

「ダーク・ウルビア！」

アルの額の前に悪タイプの力が、集まってきた。

「貴様、何を……。」

アルは、ギリスを睨んだ。

「貴様と会うのはこれで最後だ。ギリス。」

アルは、ダーク・ウルビアを発射した。反動で、足が地面に沈んだ。

ダーク・ウルビアは一直線にギリスへ向かって飛んでいき、大爆発を起こした。

「うつ。」

何とか起き上がったユシールが、衝撃波で浮き上がり、砂埃で見えなくなった。

アルは、体勢を低くし、飛ばされまいと力を入れたが、爆風の強力な風に負け、飛ばされた。

「くっ！」

アルは、仕込んで置いたロープを近くの岩に巻きつけロープに噛み付いた。辺りの木が、根元から吹き飛ばされる。

ロープは暫く耐えていてくれたが、この強風の中で甲冑を着たア

ルを支えるのは限界だった。ロープが、音を立てて千切れると、アルは空中に放り出された。

このままでは、地面に叩きつけられる。

そう直感したが、空中で、体勢を立て直すなど不可能だった。

「狂花、零式。枝垂花。」

何処からか、伸びてきた鳶が、アルを捉まえ地上に降ろした。

「こつちだ。」

そして、鳶の壁の反対側から出て来たユシールに無理やり引き込まれた。暫くすると、風の勢いは収まり、静かになった。

「おい、大丈夫なのか？」

「心配ない。さっき、止血剤を打っておいた。」

見ると、ホネが刺さっていた所には包帯が巻いてある。

「グルラニ・ジェヴ・アグゼラ。」

「？」

ユシールが突然口にした。

「意味は、牙。産まれた時から戦いの最中に置かれ、死ぬまで戦い続ける。」

「聞いていたのか。」

「嫌でも耳に入るさ。」

「この名は、好めない。」

アルは顔を下げた。消耗が激しい。あれを出したのは、何年ぶりだろうか。実戦で使うのはこれが初めての筈だ。

「戻らなければ……。」

ユシールがふらつく足取りで立ち上がった。

「戻ったら、ハクに何言われるかな。」

「嬉しいのか？」

「まさか。」

怖がつてる様な事を言ったが、ユシールの顔は笑っていた。

「こっちは家でさっさと寝たい。」

アルが、冗談を言ったので、二人は笑い声を上げた。

それとほぼ同時刻。ガレン王国の首都ヒビンにルークは降りてきていた。

ルークは、細い路地にわけ入り、一軒の店に入った。

中は、酒樽やら、割れた皿やらが散乱していた。おまけに少しかび臭い気もする。

「おい。」

ルークは、中の一人に声をかけた。そのポケモンは見るからに人相が悪い顔をしている。

「あんた等の親分は、何処にいるんだ。」

「誰だ。テメエ。何のようだ」

「貴様には関係ない。」

「テメエ、なめてんのか!」

そのポケモンは、パンチをしてきたが、ルークは軽々と受け止め、その手を擦じ上げた。

「おい。人の店で何してやがる。」

「親分！」

入って来たのは、ハブネークだった。口には煙草をくわえ、尾の先の刃のような部分が半分欠けている。ルークが折ったものだ。

「珍しい客が居るようだな。」

「丁度いい。お前の所の商品、全部買わせてもらう。」

それを聞いた店内のポケモンはざわついた。

「お前、俺達は何売ってるかぐらい、知ってんだろ。ポケモンだぞ。」

「ああ、知ってる。だから買うのさ。ほら、金ならある。」

ルークは持ってきた袋を、ハブネークに投げた。中からは金貨が出て来た。

「全部で五百。十分過ぎるだろ。」

ハブネークが袋をひっくり返して中身を確認めた。

「一人、一枚つつ持たせてやれ。あまりでも十分だろ。」

「それで、何処へ送るんだ。」

「何処にも。」

ルークはハブネークを見下ろした。

「ただ鍵を開ける。楽な仕事だろ。あと、逃がした奴らをまた捕まえるなよ。そうしたら、容赦しない。」

それを最後に、沈黙が流れた。そしてそれを打ち破ったのはハブネークの笑い声だった。

「お前、正義の味方ってか。ブツハハハハ！」

ルークはハブネークが笑い終わるのを待っていた。笑い終えたハブネークは再び口を開いた。

「お前、一緒にやらねーか。面白そうだ。」

「生憎、性に合わなくてね。」

「残念だ。わーたよ。何するか知らねーけど、やっとなやるよ。」

「そうか。」

そう言っただけでルークは店を出た。

「気が向いたら何時でも入れてやるよ！」

そんなハブネークの声が聞こえたので、バカが！　と言っておいでやった。

これで、やる事はない。ルークはナーリアへ出発した。

9 話 民とは？（前書き）

今回は、長くなりそうなので、何度かに切りたいと思います。
サス貴国の、ナナのお話です。

9話 民とは？

「なあ。本当にいるのか？」

「……。」

カイナルは、無言のハクに突っかった。
ここは、バイル島の、中央に位置する広い高原だ。伝令兵から敵の存在があつたと報告があつたのだ。

「なあ。」

「黙れ。そのうち来る。奴らは、ここよりもっと南に居る筈だ。そのうち進軍してくる。」

カイナルは、自分の手を忌々しげに見つめた。

「やっぱり、敵は殺さないといけないのか？」

「無論だ。」

ハクが、南を見つめた。

「敵は全て。戦争など、始まった瞬間からそうしなければならぬ。」

カイナルは、分かったよ。と言って。監視に戻った。いくら見ても、ホーエイムの黒い旗は現れない。

「やっぱり来ないんじゃないか……来たっ。」

カイナルは、南の方から青い旗が揚がっているのを見た。

「あれは……。」

カイナルは更に、戦う気が失せてしまった。あれは、同盟国の一つ、サス貴国の旗だった。

「敵軍を発見しました！」

「全軍、位置に付け。前衛は発て。」

ホーエイム三将の一人、キースは静かな命令を出した。

ハッサムのキースは、最後衛の櫓ひんぐすの上に立った。

作戦は、叢むらぐも横に三つに割った軍を、先頭を正面、中間を左右に展開して敵を包囲する包囲網だ。

普通、他国からの援軍は、被害が少なくなる後衛に置くのが普通だが、今回は、先頭と中間の隊にしか配備していない。

つまり、サス貴国が送った兵は人質となっているのだ。

相手側も、戦闘体制に入っている。キースは、不敵に笑った。

サス貴国に一人残されたナナは、気が滅入る思いだった。残された理由はナナの病弱を考えての事だったが、逆に病気になるそうだった。

「ハミネ……。」

彼女は、その場で何を見ているのだろう。

戦場など一度も見なかった事がないナナにとっては、全てが未知の世界だった。

「（きっと、ハミネなら大丈夫。近衛兵が命がけで護ってくれる筈）」

そう考えたナナは、ハツとした。以前、何処かで聞いた。民の痛みを知らぬ者は、民の上に立つ資格など無い。

ナナは無意識に果物用のナイフを手にとって、指先を切った。

「イタッ」

ナナは、痛みでナイフを床に落とした。今まで怪我一つした事のない指先に赤い血が流れる。涙が浮かんできた。指先が痛いのでは

なく、心が痛む気がする。

民達は、今までこの何十倍、何百倍もの痛みに耐えてきたのだ。そして、自分達はそれに気付かなかった。否、気付こうとしなかったのである。

「ナナ様。」

静かで、だが優しい声が聞こえてきた。

「貴方は……。」

「俺……いや、私は、^{わたくし}二等兵のキリアンと申します。ナナ様。これをお使い下さい。」

キリアンは、ナナの涙を白い布で拭き取り、指先の傷を優しく覆った。

「ありがとう。キリアン。」

「いえ。謝辞は無用です。ナナ様をお護りする。それが私の役目^{わたくし}でございます。」

キリアンは、右腕を胸に置き、礼をした。

「キリアン。」

ナナは、再び涙が出そうなを抑え、キリアンに向き直った。

「貴方、私をハミネの所まで連れて行ける？」

キリアンは少し戸惑ったように見せたが、考えがままとすると、

「勿論でございます。」

と頭を下げた。

「ありがとうございます。」

ナナは再びお礼を言って、キリアンに同じ事をもう一度言われた。
だが、ナナはそれが嬉しかった。

「お願い。キリアン。」

10話 民とは？

サス貴国は、独立してから小競り合いを含め、戦争という戦争を全て勝利におさめてきた。

だが、その戦い方はお世話にも、人道的とは言えない。

特に酷かったのは、ナーリアとの小競り合いだ。送り込んだ兵で、敵兵を狭い場所に誘い込み、その上から、岩を落としたのだ。

「はあ。」

ハミネは溜息をついた。戦っている戦士達の心配をしているわけでも、ナナの心配をしているわけでもない。

ただ単に、途轍もなく暇なのだ。

サス貴国は、全戦無敗を誇る国だ。その国が強国ホーエイム側についた。負ける事は無い。

「はあ。」

これは、国を守るため。そう自分に言い聞かせても何か、体の中心で疼くものがある。

「ハミネ！」

声と共に、自分の後方にあるドアが大きく開かれた。突然の事だったので、ハミネは状況の理解が遅れたが、ナナの白い体を見て驚いた。

ナナは、ハミネに構わずサッと部屋に入り、門を下ろした。

「ナ、ナナ……なんで此処に？」

「ハミネ。」

ナナは有無を言わずにハミネに駆け寄った。

「良かった。怪我は？ 少し疲れてるんじゃない？」

「だ、大丈夫よ。」

ハミネは、ナナを座らせ自分も反対側に腰をかけた。

「如何したの？ 一体？」

「ハミネ。お願い。もうやめましょう。」

ハミネは、キョトンとした。何を言っているのか全く分からない。

「こんな戦い。もう嫌。」

「ナナ……。」

七の目には涙が浮かんでいる。

「ハミネ、私、気付いたの。国の為に民が居るんじゃない。民の為に国が在るのよ。」

ハミネには、返す言葉が無かった。

一方、カイナル達は、敵の戦略にまんまと嵌り、完全に包囲されてしまっていた。
今、それを掻い潜ろうと一点に集中攻撃をかけ、隙を作ろうともがいていた。

「何なんだよ！ 全然、減らないじゃんか！」

カイナルは、切り裂くやら、アクアテールやらで応戦していた。

「喋っている余裕があるのなら、少しでも倒せ！」

ハクが、リグティラと言う、雷の鞭で目の前の三人を叩き伏せた。だが、その横で二人の仲間が、潰された蛙の様な声を上げて倒れた。これでは、全滅は免れない。

二人の頭には、この状況を打開できる策は無かった。

「クソッ」

カイナルは、敵の着ている防具の僅かな隙間に、爪を滑り込ませ引き倒した。

「本当に何も無いのかよ！」

カイナルが、そうハクに悪態をついた時だった。ピーッ！と甲高い笛の音が空に響き渡った。

音が消えるころには、既にその場は混乱に陥っていた。サス貴国の兵士達が踵^{きびす}を返したのだ。

勿論、そんな事毛頭も考えていなかったホーエイムの兵士達は隙だらけだ。それを逃すほど此方は弱くは無い。

向こうの方では、撤退するサス貴国と、ホーエイム皇国が衝突を起こしている。

カイナルは、空に白い者がいるのを見つけ、ハクに目を向けさせた。

「命令よ！ 一時撤退して、体勢を立て直しなさい！」

その空に浮かぶ、白い物体から、大きな怒鳴り声が聞こえてきた。ハミネの声だ。だとすると、乗っているのはナナになる。嬉しい援軍だ。

「敵を追い込め！」

カイナルの声に、兵士達の顔に生気が戻る。

「ねえ、ハミネ。久しぶりにやりましょう。」

「ええ。目標はあそこよ。」

ハミネは、ナナの背中から体を乗り出し、一番後ろにいる赤いポケモンを指差した。

ナナは頷いて、波動弾を作り出す。ハミネは、それにスピードスターを混ぜ込んだ。波動弾は、スピードスターの力を受け取り、水色と黄色の光を放っている。

「いつけー！」

ナナは、それを、赤いポケモンのすぐ目の前に落とした。

流石のホーエイム軍も、空に対しての対策無しでは、ハミネ達の姿は捉えられても、打ち落とす事は不可能だ。

敗戦の空気が流れ出したホーエイム軍は、作戦を放棄して撤退していった。その様子を、二人は満足げに見下ろしていた。

10話 民とは？（後書き）

さて、次回からはルークが登場します！
やっただろ。

11話 出港（前書き）

さて、ルークの登場です！

11話 出港

波の音が聞こえる。ナールアのきれいに舗装された石畳は、歩くとひんやりとしていて気持ちがいい。潮の香りがより強く鼻をつく。そこを曲がればもう港のはずだ。

今は夜。夜は月が支配する漆黒の世界だ。ただ輝けるのは、自身と、許された星たちのみ。

潮の香りが、鼻をつく。この匂いはあまり好きではないが、仕方が無い。こんな時間にいるとは考え難いが、行ってみるだけ行ってみようと思いここへ来たが、人の気配は無い。ただ、波の音と、海風の音が響いている。

いや、ただ一人いた。黄色と黒の縞々の体に尻尾に赤い球体を持つポケモン。デンリリュウだ。

「おい。」

デンリリュウが、眠そうな目をこちらに向けた。

「シユラーという名の船乗り、知らないか？」

デンリリュウは、欠伸混じりに答えた。

「それは、俺だけど。アンタ誰？」

声からして、まだ17、6位だろうその目には眠気と共に警戒も含まれている。

「ガレン王国から何か聞いている筈だ。私の名は、ルーク。」

その一言で、シュラーの眠気は何処かへ飛んでしまったらしい。大口を開け啞然としている。如何やら本当に来るとは思っても無かったようだ。それもその筈。戦時中のホーエーム皇国に不法侵入をするなんて、自殺行為だ。

「ちょ、ちよつと待った！　すぐ、カミア連れて来っから！」

そう言い残し、シュラーは船をおいてそくさくと駆けていった。

ルークは、近くにあった木箱に腰を下ろした。

ルークはまず、鎖国中のガレン王国を抜け出した。勿論、妃の言葉跳ね除けてやって来たので通してくれるわけが無い。そこで、お得意のエンギをした。

見張りの軍服を拝借し、『交代の時間だ。』と言って、油断させた隙に、首に一撃を喰らわせたのだ。

可哀想に、その見張りは一撃で昏倒してしまい。後の対処に困ってしまった。仕方なく、その見張りを隅に隠し次の見張りが来るまで待つ羽目になってしまったのだ。

そんなこんなで、無事ガレン王国を不法出国したルークは、ナリア王国に辿り着いたのであった。

「ルークの旦那。」

旦那。そんな呼ばれ方はされた事が無いので、一瞬答えに迷った。シュラーはそんな事お構い無しに話を進めた。

「今、出港する？　それとも、明日の明朝にする？」

ルークは苦笑いをした。

成程、確かに彼らに頼んだのは、正解だったようだ。シュラーの

格好は、既に発てるようだった。

横にいるシャワーズも欠伸をしているが、準備は出来てる。

「今から出たら。何時着く？」

シュラーは、口を歪めた。ルークは、口元だけ笑って見せた。

12話 海上戦

自分の上で戦争を行っているのが嫌なのか、海はとても機嫌が悪かった。波は高く風が強い。気を抜いたらすぐ流されてしまいそうだ。

その点、空は太陽が支配して覆いの無い船の上では日が肌に突き刺さる。潮風で眼が痒くやはり海は好きになれそうに無い。

その上、ホーエイムの軍船は大きな船室を持ちこの程度の波など無に等しいほどの速さで進んでくる。最悪だ。

「カミアー！ もっと速くしろー！」

「これが限界なんだよ！」

先程から、矢や遠距離の特殊攻撃が次々に飛んでくる。その度に船は木の葉のように揺すられて捕まっていないと振り落されそうになる。

「ルークの旦那！ 何かしてくれよ！」

シユラーが急に舵を切ったので、カミアが海に落ちそうになった。自分も如何にかしたいが、今、飛び立てば絶好の的だ。翼をやらせて海に落ちるとするのが常識だ。

「良いが。船が沈むぞ！」

それにもう一つ、問題がある。地面や大型船舶なら兎も角、喫水の低いこの船では海水が流れ込んでくる。その後は、船乗でなくても分かる。そこから傾き冷たい海に投げ出されるだけだ。

「仕方ない。カミア！ 行けー！」

「はぁ?!」

シュラーの突然の命令にカミアは素っ頓狂な声を上げた。

「奴らの船底ぶち抜いて来い！」

カミアは一瞬躊躇したが、意を固めると海に飛び込んだ。

その間も船は高スピードで波を?き分けていく。

暫くしてカミアが息切れをしながら戻ってきた。顔は得意げに笑っている。

「アハハ。船尾の船底に穴開けてきちやった。これで足は遅くなるでしょ……」

「それは良かった！ じゃあ、水中翼船に変える？」

そう言つとシュラーは近くにあつたレバーを手前に引き下に向かつて押した。

レバーは、船体に飲み込まれ、代わりに ガコ という音が船底から聞こえた。

カミアは仕方ないと言つた表情で、ハイドロポンプを海に放つた。ガクンと船首が持ち上がり、次の瞬間凄まじい速さで進み始めた。後ろの軍船はどんどん遠くなり、やがて点のようになり見えなくなった。

如何やら、先程の音は水の中に羽を出す音だつたらしい。羽で船体を持ち上げ抵抗をぐんと減らす。その上ハイドロポンプだ。追いつける船などこの辺りには無い筈だ。

「ふう。」

シユラーがため息をつく、カメラが放水を止め速度が落ちてきた。そして、盛大な飛沫を上げ船首が着水した。

やはり、海に関しては船乗が一番だ。と思つた矢先、正面から先程とは違う大型の軍船が姿を現した。ナーリアの物ではない。戦時中に安息の時間など無い。

シユラーはあまりに突然だったので、舵を取りをこねた。この位置では格好の餌食だ。

「くそっ」

今度は、もう我慢できなかった。それに、波が来たお陰で、船は沈む事はない。

ルークは、次々と飛んでくる攻撃を全て薙ぎ払った。

跳んでくる攻撃の軌道が全て分かるような感覚がどこかで芽生えた。

「終わりが……？」

千を越す連続攻撃を全て薙ぎ払うと、見るだけで背筋が凍りそう、それでいて灼熱の怒りを込めた眼を軍船に向けた。

船上のホーエイム軍の連中は、ルークの顔すら見えないだろうが、ただならぬ気配には敏感らしく、各々の顔から血の気が引いている。気分がいい。

圧倒なる力で全てを支配する。知らない内に、ほくそ笑んでいた。勿論、自覚は無いので、止めの流星群を撃ってやった。

流星群は、甲板を捉え、火薬にでも引火したのか火の手が上がった。

ルークは満足げにそれを眺めた。

ルークはシュラーの船に戻ると、溜め息をついた。

「かわいそうに……。」

シュラーとカミアが不安げに見つめてきたので、背中越しに沈んでいく船を見ながらそんな事を呟いた。

13話 上陸

シユラーは船を近くの浅瀬に着けた。

後から正規の港へ、船は移す予定になっている。こんな所では明らかに密入国しているとばれてしまうからだ。

「ここから、西に少し行っただころに港町がある。そのすぐ上の丘に砦があるはずだ。」

「じゃあ、船で待ってる。」

シユラーは、ルークを見て言った。

「生きて帰ったら、ブドウ酒浴びる程飲もう！」

ルークは苦笑いを浮かべるしかなかった。

ブドウ酒は確かに美味いが飲む気にはなれない。

「覚えておく。」

だから、曖昧な事を言っただけ以上は口を詰むんだ。

「行ってくる。」

特に言っておきたい事は無い。計画は船の上で何度も合わせていた。これ以上はいざ起これないと分からない。

それを考えると、心配事は無いとは言えない。だが、ここまで来たら振り返る事は出来ない。

だが、相手もそこに隙が出来るだろう。ろくな装備無しで敵国へ

飛び込んでいく馬鹿なんて誰も考えない。付け入る狙いはそこだ。一人でも攪乱させることが出来れば何とかなるかもしれない。

かなりの大勝負。賭け事で言う一発逆転を狙う策だ。失敗は自分だけでなく、それに関わった全員の死を意味する。

一度、深呼吸をすると、砦への道に足を踏み入れた。ここから先は何が待っているのか何も分からない。

頬に風が触れた。血の匂いが鼻をつく。ルークの足元には血の水溜りが出来ていた。その先を見ると喉から血を流し倒れている二人の門衛の姿があった。

ルークはこの見取り図を知らない。仕方なく堂々と正面から出向く。二人を確認した瞬間喉を裂いたのだった。

付いてしまった返り血は、一応拭いておいた。が、爪先には余程大量にかかったのか、少し色が付いてしまった。

後ろには、誰もいない門。前には広い訓練場、その奥には一際大きい建物が建っている。壁は茶色がかった赤で、辺りの森の緑の中で特に目を引く。

ルークは、建物の影を滑るように駆け抜け、一番大きな建物。おそらく、敵の重要補給点であるその扉に手を掛けた。

扉は思ったより軽く、簡単に開けることが出来た。

少し、扉を開け中の様子を探る。

誰もいない。

とりあえず、一安心だ。

ルークは、なるべく足音を立てないように中へ潜り込んだ。

薄暗い廊下は奥に延びていく。場所が分からないのでやみくもに角を曲がっていく。

そこで、ある事に気が付いた。ランクの居場所どころか自分の場所すら分からない。緊張でそこまで頭が回らなかった。ありえない失態だ。

足を止めて数秒間頭を回す。そして、それらを全て知る方法は一つしかない。

ルークは、声のする場所に近付いていった。

なるべくなら穏便に事を進めたかったが仕方ない。

「いたぞ！ その角だ！」

「逃がすな！」

後ろから、怒号が聞こえる。ルークは、その音の雑踏の中から必要な情報を聞き出した。現在地。此处にいる人数。そして、ランクの居場所だ。

追われている理由は、ルークが見回りに来た二人の内の一人に襲い掛かったからだ。勿論、襲われた方は卒倒だったが、もう一人が仲間を呼び集めたため今の状況だ。

内心、少し嬉しい。こんなに来てくれるのなら、何か仕掛ければほぼ全員を倒す事が出来る可能性があるからだ。

勿論、仕掛けをしないわけが無い。さっきの角にはドラゴンの力を細く延ばし張り巡らせて置いた。掛ければかなりの足止めが出来る。

案の定、後ろからは「早くしろ」とか「こつちだ」とか言う声が

聞こえる。

しかし、疲れた。毛の先程の細さまで細くするには相当疲れるのだ。

ルークは目の前にあった扉を開けた。誰もいない。

暫く、この部屋に身を潜める事にしよう。

張り詰めていた神経を少し緩める。だが、その行動はすぐに後悔に変わった。

背中に針が刺さった感覚を最後に体がいう事をきかなくなる。崩れ落ちそうになった体を誰かの腕が支える。

「お久しぶりですね。」

どこかで聞いたことのある声。

「調べさせて頂きましたよ。」

一体、何を。

「覚えてますか？ この呼ばれ方。」

耳元で囁く様にそいつは言った。

「悪魔憑き。」

「！！！」

動かない体の代わりに、どこかにある記憶が大きく跳ね上った。

14話 毒使い

「誰だ……。」

何とか出せた一言目は掠れ、すぐに部屋のの空気に消えた。乱暴にうつ伏せに寝かされたので顔が痛い。

「そのうち思い出すだろう。だが、俺は貴方を知っている。会ったこともある。それに北で色々調べさせてもらったな。」

「北？」

ここから北、と言ったならナーリアを含みカトラルより南のはず。カトラルより東は行ったことが無い。

「まだ分からないか……。ガルの奴は俺の名前をずいぶん簡単にしていましたね。ま、お陰で動きやすかったのですが。」

まさか。裏切り。

いや。あのガルに限って気が付かないわけが……。

「思い出していただきましたか？」

「何をしている……。ガレンの者ではないのか……。」

動きにくい身体を無理矢理捻り声の主を捉える。

植物のような緑色、手首にはよく切れそうな葉。その二つを持ち合わし尚且つ自分の事を知っている。

「リーフ……」

ガルの下に就き、以前共通の敵を相手に戦った。ガルの最も信用していた部下だった筈だ。

そのジユカインは面白そうに此方を見下ろしている。何時、^{いつ}掌^{てのひら}を返したのか、腰に付けている鞆にはホーエーム皇国の国旗が描かれ、空けたままのそれからはいくつもの小瓶が覗える。右手には指の間に三本の針が鈍い銀の光を放っている。

その内の一つの先に赤い液体が付着している。あれに毒でも塗って刺したのだろう。

「そう。貴方の考えている通りですよ。」

ルークの頭の中が透けて見えるような物言いだ。ジユカインは少し間を空け面白そうに笑った。

「否、失礼。悪魔憑きに自己紹介なんて初めてなもので。」

言葉では謝ってはいるが平謝りなのは一目瞭然だ。

「俺は、毒使い。リュビツセ・ライガ・セイーフ。ライガと呼んだ方が楽だと。それとこいつは……」

「ヤレイ・ナーハルよ。」

ライガの後ろから姿を現したのは、バシャーモだ。声は見た目よりも低い気がする。

「俺の仕事仲間です。連れて来るのは簡単でした。思いのほか毒に

「やられやすかったのが誤算でしたが。」

「よく言うよ。」

ナーハルがクスクス笑う。

「毒を盛りすぎて殺しそうになったくせに。」

「五月蠅い。思ったより効きやすかったんだ。文句を言うなケツでか女。」

「喧嘩売ってるわけ……」

ナーハルはライガを睨む。

対するライガは強気だ。

「ありのままでわかりやすいだろ。」

「このつ。アホっ！」

ナーハルはライガの顔を殴りつけた。

「お前…俺を怒らせたな……。」

赤くなった頬を摩りナーハルを睨む。

ルークの事は、頭の片隅にすら無いだろう。

「おい。」

「「なんだ!」」

険悪な空気の中、完全に忘れ去られたルークは思わず声をあげた。それに返ってきたのは、二人の怒号だ。ますます居づらい。

「あ、忘れてた。悪魔憑き。」

「黙れ。」

悪魔憑き。意味はそのまま、産まれる前に悪魔は妖精が入り込む事らしい。

それは、外観や能力に通常現れないものが現れる。教会に酷い扱いを受けるが、実際悪魔や妖精がいる訳ではない。ただ、自分達の信じる神を否定される可能性があるという理由からだ。

一人ではどうする事も出来ない強大な力による差別。といった方が分かりやすい。

「悪魔憑きは何処の教会も火刑だからな。」

「だったら、代わりに執行人になるか。」

ピツと右の頬が撫でられた。その傷から温かい血が滴り落ちる。見ると、ライガの右手首の葉が鋭い刃になっている。リーフブレードだ。

「まあ、似たようなものかな。」

そう言ってライガは鞆から液体の入った瓶を取り出す。色は深紅だが辛うじて向こう側は見える。

その蓋を開けると、何の迷いも無くルークの頬の傷口にかけてい

く。赤い液体は血と殆ど区別がつかない。

「珍しい被検体を炎にくべるわけが無いだろ。」

言い終わると、痛みが全身を駆け巡るのがほぼ同時だった。

初めの麻酔は一瞬で意味を成さなくなり、ルークは声を荒げそうになった。が強烈な蹴りを鳩尾に喰らい悶絶した。

「叫ぶと見つかるから静かにね。」

蹴りを入れた本人。ナーハルは軽々とルークの体を持ち上げた。

「取り合えず。どうする？　これ。」

これと言つのはナーハルの肩の上でぐったりとしているルークの事だ。

「物置にでも入れとけば見つからないだろ。出来れば、毒の効き目を見たいからな。それには野放しが一番いい。暫くしたら起きるだろうっしな。」

14話 毒使い（後書き）

ライガは神を呼ぶポケモンに、ナーハルは南海の使者のあのバシヤ
ーモです

気になる方は読んでみて下さい♪

ライガ「俺たちを宣伝に使うな。」

15話 毒の正体

暗い。

ここは何処だ？

一歩足を踏み出す。ピチャ と足が水に触れた。油だ。

気付いた時には辺りは炎の壁だった。飛び立とうにも翼が凍ったように動かない。

そうこうしているうちに、炎が体を包み込んだ。

「！」

ルークは飛び起きた。

夢か。嫌な夢だ。

『悪魔憑き』その言葉だけが頭を回る。

無意識に左目に手を当てる。

悪魔憑きと言われるようになったのは、この左目のせいだ。左目だけ暗闇で碧く光を反射する。

昔、誰かに見られてこんな言われようだ。おまけに感度の良い耳ときたら教会から見れば勝手に崇めてる神の敵なのだろう。

ふと見ると、近くにナイフが置いてある。

無意識に手にとつて鞘を抜く。そして暫くそれを見つめた。

鈍く光る刃に自分の顔が映る。

不意にナイフの切っ先を左目に向けた。刺さる直前に右手がナイフを持つ左手を抑え、切っ先は目から紙一重のところまで止められた。その状態で数瞬動きが止まる。

ルークはナイフを投げ捨て、大きく息を吐いてから静かに笑った。以前にも目を刺そうとして、止めた事がある。一度目はシグラに止められ、二度目は怖くて、だ。

そんな自分を嘲笑うように、静かな笑いが声付きの大笑いになっていた。

笑い終わると、今度は孤独に涙が出て来た。

カトラルでは、国を追われ、折角の誘いも断ってきた。ガレンでは親友を捨てたった一人でここへ来た。許してくれる筈がない。

涙を拭おうとしてふと、あげた右腕に紙が結び付けられているのに気付いた。

それを解いて広げてみる。手紙だ。

『悪魔憑き。お前に打った毒は、神経系の毒と血壊系けっかいの毒を混ぜたものだ。

神経系の毒は神経を逆撫でするからお前にはもってこいの毒だ。もう一方の毒は、四分の一日程で蝕んでいく。どうなるかは自分で確かめるんだな。

ただ、毒が回るまで捕まえて置くのは不憫すぎるからな、お前の牙に鍵を引っ掛けておいた。お前らの大切な奴がいるんだろ。その鍵だ。後は自分で何とかしろ。

それと、この毒には名前が無い。良い名前考えてくれ。』

字は、前にガルが見せてくれたリーフ（今はラルガだが）の字と全く同じだ。

「……。」

それを見て、少し落ち着いた。落ち着くと、周りの様子が分かってきた。

ルークの頭上にある窓から朝日が入り込み、部屋を照らしている。天井まである棚は乾燥させた毒草の入っている籠で一杯になっている。

る。よく見ると丁寧にその植物の名前が書かれたプレートが立て掛けてある。

机の上には、天秤や、乳鉢、細かいメモが書いてある紙などが散乱している。さっきのナイフは木を削る為の物だったのだろう。

ルークは立ち上がり、その先にある物を見つけた。

それにはヒグレイマと、東のラドル語で書かれていた。

この草なら知っている。抑制作用がある神経系の毒草だ。普通のポケモンが口にとると、睡魔が襲い、ゆっくりと心臓が止まる。別名、眠りの悪魔。

だが、少量で尚且つ、神経を興奮させる毒草を食べた時の解毒薬として用いられている。心臓の病魔にも薬として使われることも多い。

ライガがルークに投与した物は恐らく神経を興奮させる毒だ。少量なら、逆に役に立ってくれる。

ルークはヒグレイマの葉を一枚千切って口に入れた。ついでにさっきからする鈍い痛みを抑えるために麻酔薬も拝借した。鋭い痛みは気を紛らわせられるが、鈍い痛みは逃げ場が無い。気休めだが無いよりはましだ。

薬草師の親友がいて本当に良かった。

問題の血壊系の毒には対処の仕様が無いのでほっておく。

ルークは、ライガが牙に引っ掛けていったという鍵を床の上で見つけ、そつと外へ通じる戸を開けた。

誰もいない。

さっき使った体力は寝ている内に七割ほど回復している。次にあんなへまをしたら串刺しにされるだろう。

ルークは足音を立てない様に、そつと外へ出た。

16話 再会と……

悲鳴のあとに、金属がぶつかり合う音が聞こえた。

その音は次第に近づいていき、目の前の厚い鉄の扉の前で止まった。

ガチャリと鍵が外れる音がして、錆ついた厚い扉が金属的な悲鳴を上げながら開いた。

その僅かに出来た隙間から、真っ赤に染まった手が見えた。

「！！！！」

ランクは恐怖で反対側の壁に張り付き、扉を凝視した。

「うつ……」

ズルツという音がしたと思ったら、扉が押し開けられ見た事のあるポケモンが倒れこんだ。

両手は赤く染まり、右の頬には刀傷があり血の臭いが漂っている。

「ハアハア。ランク、大丈夫か……。」

天と地ほどもある身分の差を無視して呼んでくれるのは片手で数えられる位しかない。その中でここまで来てくれるのは……。

倒れていたポケモンがふらつきながら起き上がる。

いつも、遠巻きに周りを見て必要とあらば刺すような視線を向ける鋭い目。

「ルーク！」

一人で震えていたランクに、一筋の希望が甦った。

あの毒草の置いてある部屋から出たルークは、あの時の記憶を頼りに怠けようとする体に鞭を打って足を運んだ。

途中、敵に遭遇したときのことは殆ど覚えていない。だから、安否も分らないが、今更、戻る気にもなれない。

振り向かず、ただ前しか見ずに突き進んだ。

牢獄の前までの事は覚えていたが、やはりそこからの記憶は途切れ途切れになってしまっている。気がついたらランクが目の前にいた。その前に何か声をかけたような気がするがそれすら覚えていない。

ただ、足元で蹲って泣いているのが見える。

ルークはランクを引き離すとしやがみこんで言った。

「泣くのはいいが。さっさと逃げるぞ。」

ランクは頷きかけて動きが止まった。

今更何を。と気が立ってきたのはライガの毒のせいだと信じたい。

「ルーク……。」

ランクが控えめな声を出した。何かをねだるときの様な声だ。

「皇王が此処に居るんだ。」

その一声ではっきりと意図は通じた。

「で、如何したい？」

ランクは、戦争を止めさせたい。だが、戦場でランクが出来る事などたかが知れている。

だからこそ、皇王に会って理由を知りたい。何故こんな戦いをするの。こんな事をして何になるの。この戦いで民の苦しみを分かっているのか……。

この戦いを言葉で止めさせる事が出来るのは、今のところランクしかない。

だが……。

「絶対に無茶はしないから。」

ランクはルークの考えを言う前に読み取った。

ルークの心配は唯一つ。ランクが一人で無茶をして死んでしまう事だ。

そんな事が起こったら自分がここへ来た意味は無になる。勿論、命がけで船を出してここまで来たシュラーとカミアの頑張りが無駄になる。

「絶対に……。」

ランクの顔を見てハツとした。

どうせ死ぬなら、悪足掻きでもしてみるか。

ルークは仕方ないという風にため息をついた。

17話 皇王と魔の手

ササツと廊下を駆け抜ける。

止まるのは、扉を開けるとときと、敵に遭遇しそうになった時だけだ。

一応、頬の血や残った毒の染料を拭き取ったが、血は固まり、染料は見事に毛に染み込み頬のところだけ、赤茶に染まってしまった。ライガの毒は予想以上に強力だ。だが、壁にもたれたりすれば、ランクに要らぬ心配を掛けさせてしまう。

どの位進んだらうか、目の前に両開きの大きな扉が現れた。押し開けようとしても開かない。だからと言って、引いて開けるタイプの扉ではない。

「クソッ」

何度も体当たりをしたお陰で隙間が少し出来た。

その隙間に手をかけ無理やり押し開けた。扉の反対側に引っ掛かっていた物がずり動き、鼻をつく血の臭いと死臭ともいえる臭いが二人を襲った。

嗅いだ事のない臭いにランクは鼻を押さえ息をしないようにしていた、こんな臭いに慣れているルークでも流石に顔をしかめた。

生き物の気配が全く無い。廊下の奥に無数に息絶えた身体が散乱している。

「酷い……」。

ランクは、息を止めるのが限界になったらしく小さい声で囁いた。

「襲われる心配は激減したな。」

ルークは、自分にも言い聞かせるように言った。そうしないと、落ち着かない。

それに、言った事も事実だ。一々弔っている時間など無い。ただ気をつけなくてはいけないのは、これをやった犯人だ。

「行くぞ。」

ランクは、物悲しそうに見てきた。

これが戦争だ。どうしようもない。戦場では、誰もが冷酷で、冷やかだ。

そう言おうとして後ろを振り返った瞬間。喉元に長剣の切っ先を突きつけられた。

ランクは、一応無事だ。

「……。」

「……。」

ルークは、動かずに相手の目を睨んだ。茶色い岩のような体に鋭い鎌の様な両手。長剣だと思ったものはその切っ先だった。

そのポケモンは、カブトプスだ。

「侵入者が。」

カブトプスが口を開いた。

「あやつの言っていた事はよく当たる様だな。皇王に会わせてやる。」

反論は出来ない。

何処からかカブトプスの部下が現れ、ルーク達は敵の手に落ちた。

暫く進むと、両開きの大きな木の扉が現れた。

皇王が居るというのに、酷く錆び付いている蝶番がギシギシと泣いている。

部屋は薄暗く、どこか黴臭い。そんな中に薄汚いベッドが一つ。見ると、ベッドに掛けてある毛布が上下している。

毛布の上に見える、長く細い葉は、お世辞にも生氣があるとは言えない。

まさか、これが皇王。

ランクも、有り得ないという顔でベッドを見ている。すると「見ていろ」とカブトプスが前に出た。

「皇王。いや、リュビッセ・ガビッツ・セイーフ。」

その声に、毛布の中のポケモンが反応した。
起き上がったそのポケモンはジュプトルだ。

とても、この大国を納め、王国連合軍との戦争を指示した張本人には見えない。むしろ、巢から飛び出せない気の弱い^{とかげ}蜥蜴だ。

「ヒバタ？」

その名前はランクの方が詳しいようだ。

小声で「天神殿の大司祭だ……」と呟いていた。

ホーエイム皇国はグライドンを奉る、地神殿、カイオーガを奉る、海神殿、そして、それらをまとまるレックウザを奉る、天神殿の三つが存在する。その中でも天神殿の司祭は大司祭と呼ばれ、皇王の次に権力が大きい。

だがこの状況は、どう見ても侵入者を見つけ報告に来たというわけではない。

連れてきたルーク達をなにかの証人にしようとしていると考えられる。

「皇王の座を、頂に参りました。」

そう言うとかブトプス。ヒバタは、右の鎌を大きく振り上げた。
次の瞬間、血飛沫と共に重たい物が落ちる音がした。

18話 怒りの刃

血がパツと床に広がり、そこに何かが倒れこんだ。

とつさにランクを後ろに追いやり倒れたものを見る。皇王ではない。だとしたら……。

見ると、岩のように硬い筈のカブトプスの表皮に剣が突き刺さっている。刺したのはヒバタの部下だと思っていた奴だ。

「ふん。愚か者め。」

皇王がヒバタに冷たい言葉を向ける。

「ぬしの事は、既に分かつておった。よは確かに寝込んでおるが、その間によの尖鋭隊を育てるなど造作も無い。そして、それをすり返ることもな。」

皇王の目は次にルークに向けられた。ライガに付けられた傷を見て少し笑った。

「死にぞこないが。あやつの毒を喰らって生きておった奴は誰一人いない。」

皇王が、ベッドの近くの壁をドンドンと叩くとその部分が外れ、白い薄手の外套をまとった皇王の言う先鋭隊が姿を現した。黙認できるのは五人。だが暗いのでその三倍は居るとはずだ。

「リアルはまだ使える。生け捕りにしろ。悪魔憑きの方は殺している。」

皇王が一声かけると、白い外套をまとったポケモンが掛かって来た。何のポケモンなのかは暗くてよく分からない。

だが、関係は無かった。

「うわっ！」

ルークに一番最初に攻撃を仕掛けてきたポケモンが悲鳴を上げた。攻撃をしようとだした手首の三分の一の深さまで切り裂かれたようになっている。明らかな刀傷だ。

「黙れ」

だが、その叫びは一瞬で消えた。代わりに、静かだがよく通る声があった。

一瞬動きを止めていた白尽くめのポケモンは、思い出したようにランクを捉えようとした。

だがそれも、届くはずも無く床に叩き伏せた。

その時、ランクは薄闇の中で黒っぽい紫色をした鋭い何かが動いている事に気がついた。その先には、ルークの姿がある。見た事も聞いた事もない技だ。否、技と言えるのかさえ疑問だ。

だが一ついえる。ルークはこの技でこの空間を恐怖という力で支配してしまった。

飛んで来た刀を避けると、懷に跳び入り腹筋を切り裂いた。

飛び道具使いは簡単だ。

ルークは、ランクが見た黒っぽい紫色の両刃の片手剣を二本手にしていた。否、剣ではない。逆側にも同じように鋭い刃が付いている。丁度真ん中で折ればびったりと重なるくらい精巧だ。

ルークはそれを使い。攻撃してくるポケモンを薙ぎ倒していった。上からの攻撃ならば顎を叩き、下からは首の付け根に先を突き刺す。全て急所は外してあるが、実際は分からない。

「……。」

突然の背中を狙った不意打ちにライガに付けられた頬の傷に巻いていた布を解き、目に擦り付けてやった。

がちがちに固まっていた毒は、再び開いた傷から流れる血で溶け、またその強烈な威力を発揮した。

擦り付けられた方は痛みで目を押さえ、苦悶した。

そして、最後の一人を叩き伏せると、皇王のベッドの上に飛び乗り片足で押さえつけた。

刃の切っ先を向けると、斬ったポケモンの血が滴り、小汚い毛布に更に赤いしみを作った。

「ひっ！」

皇王が、それを見て涙目になった。所詮は小刀すら使った事もない奴だ。部下を倒せば四肢を奪ったのも同然。

恐怖に支配されている皇王をルークは無表情で見据えた。

「たすけて……。ヒバ……タ……。」

自分が手に掛けておいて助けを求めるなんて。

ルークは容赦なく、切っ先を喉の真上に持ってきた。

一瞬、上で止めてから振り下ろす。だが

「やめてっ！」

刺さる直前に腕に何かが飛びつき切っ先は皇王の首の直ぐ横に深々と突き刺さった。

「やめて！　こんな事しても、意味が…無いよ…。」

飛び付いてきたのはランクだ。

それに気付いた途端、怒りで握っていた手に気が付いた。ルークは歯をギツと噛み締め、ランクを睨んだ。そして、直ぐ後ろを向くとピチャピチャと水の音を立てながら出て行った。

一人残された皇王は動けずにいたが、ピクツとヒバタの腕が動いたのを見るとヒバタに駆け寄り助け起こした。

19話 毒の死期

ざわざわと木々が招かれざる客を覆っている。

二人は、船がいる筈の港に走っていた。

港と言っても大きくはなく、忘れられた漁村にある古い漁港だ。村人達は当の昔にもっと西の大きな港の方へ移されたいらしい。

「ねえ。ルーク。」

ランクは、ルークの後ろを追いながら声をかけた。

皇王の居た場所から此処までかなり不機嫌で話しかけられなかった。

「さっきの……あれ。何？」

さっきのあれとは、皇王の所で見た黒紫色の物のことだ。

「……。」

再び無言。先程からずっとこの調子だ。

ランクは、答えを諦めた少し後

「あれは……。カトラルの代々セレン氏族領主だけに伝承される技だ。名前はドラゴンスピヤー。」

ルークは口を押さえて咳をした。

そういえば声が少し変だ。

「カトラルの伝承技は、各氏族にあるが、大きく分けられる……。」

ゴホッ。普通の攻撃系の技と…、武装系の技だ…。」

ルークの足は次第にゆるみ遂に歩き始めた。

「あの技は…本来、紫の半透明の色をしているが……。私のは不純物な力があつて…黒っぽくなる…。」

ルークは、苦しそうに話をしている。意味が分かることに言葉を切つては息を整えている。

「だからこそ…国から…追い出され……」

ヒュンという音がして目の前に影が出来た。

うつ。とルークが呻き声を上げる。

ランクはその下から這い出ると、ルークの左肩を貫いている矢が目飛び込んだ。

更に、ガサガサと木の葉の間を突き抜けて矢が飛んでくる。この森の反対側に狙撃主が居るのだ。

ランクはルークに、無理矢理、引き戻された。

「下から…出るな…。」

そう言つてルークは地面に爪を突き立てた。

その少し後、ガラガラという音と一緒に森から土煙が上がった。

それを聞いた後ルークはやっとランクの体を放し、起き上がった。

「矢を、抜いてくれ…。」

そう言つてルークはドラゴンクローで鏃^{やじつ}を折った。普通、矢には返しがついているので羽根か鏃を取らなくてはいけない。

「矢の下を、押さえて、引っ張ればいい。」

そうは言っても、矢を触るだけで痛そうな声を上げるのを抜く自身はない。

「早く…しろ。」

その言葉にようやく意を決して矢を引き抜く。ルークが苦しそうな声を荒げた。

「ルーク……。」

「大丈夫だ…。早く……。」

ここで、ルークは多きく咳をすると血を吐いた。

ルークはとつさに口を手で押さえると手が真っ赤に染まった。暫くすると血は止まったが、少し眩暈がする。毒が回ってきた。訳を言わずにランク一人で港まで走らせる事は出来るが、絶対に

ここを離れないと言っだろう。

「まだ……。行ける……。」

ランクに言い聞かせたつもりが、自分に言ったように聞こえた。どいうわけか、血を吐いたら少し楽になり体のだるさが少し取れた気がする。

「行こう……。」

血で血を洗うとはまさにこの事だな。ルークは心の中で少し笑った。

20話 戦う理由

左腕が重い。

先程の矢傷から血が滴っている。まあ、いざとなったらドラゴンの力を巻き付け無理矢理動かせば良い。

そんな事を考えながら、船の待つ港まで歩いていく。

追っ手はまだ気配がない。だが、必ず来る。

「船って、あれのこと？」

ランクがふと気付いたように指差す方向には白い帆を揚げている小型船があった。甲板では、黄色と青のポケモンがこっちを見ている。

ルークは出せるだけの声を張り上げた。

「出港の準備をしろ！ 乗せたらすぐ船を出せ！」

手旗信号で指示をだしたほうが良かったかと思ったが、そんな心配は無用だったらしく、シュラー達は手を大きく振ったら船を繋いでいる縄を解き、帆を張る準備を始めた。

廃墟と化したかつての、漁村らしき建物の間を進んで行く。

「旦那。大丈夫ですか？」

体を引きずりながらも、何とか港に辿り着いた二人は、シュラー

に受け止められた。

「ああ、多分……。」

あの毒使い。ライガの言っていた六刻は既に過ぎた。だが、あの時以上の症状は現れない。

不思議なことに、生き物は自分が死ぬ時が分かると言うが、そんな感覚も今のところは無い。速く来てくれたほうが踏ん切りが付いて良いような気もするが。

「兎に角……。ランク……否こいつを連れて早く船を出せ。何時、追っ手が来るか……。」

追っ手が来るか分からない。そう言おうとした時だった。

ヒュンと耳元で空を切る音がし、矢が通り抜けた。

シュラーは驚いて跳び降り、ルークは舌打ちをした。

「時間が無い。お前、早く乗れ。私が時間を稼ぐ。」

ルークは、足元にいるランクを無理やり船に乗せた。勿論ランクは反抗したが、到底及ばない。

「シュラー。船を出せ。」

「待って!」

シュラーは、同時に二人の言葉に挟まれ困惑した。

「何で! ルークも乗ってよ!」

「……。何故だ。」

ランクは意外な反論に言葉が詰まった。

「何故って……。」

ルークはそんなランクを無視して続けた。

「私の目的は、ランク。お前をガレン王国へ行けるようにする事だ。私の生死は問われない。目的は果たした。ここからは私の自由だ。」

反論は無い。

事実、ランクは契約の内容を知らない。否、そもそも契約すらないのだから、全ての決定は自分自身でする。

例えば、ランクを見捨てた所で何の非も無いと言う事だ。

それを言った途端、ランクは泣きだしそんな目を向けた。否、少し泣いていたかもしれない。

ルークは改めて、ランクに己自身の無力を正面から叩き付けたのだ。

「それに、私の正体を知ったら、どの道、恐れを抱く……。」

そう言って、背中を向けた。

「行け。巻き添えを喰らって死にたくなければ……。」

そう言って、足を進めようとした。その時

「戦う者は三種類いる。一つ目は、それ自体を目的としている者。二つ目は、何かの代償のため。三つ目は、目的の途中で戦いがある

ため。」

ルークはギョツとした。

今の言葉は、西の大陸の戦士がよく言う、戦いを正当化させるための言葉だ。

普通、王宮育ちの戦いなど無縁な王子が知る筈の無い言葉だ。今度は、ランクが話しの主導権をとった。

「ガルが、言っていた。ガレン王国の王子として命令する。船に乗れ！そして、質問に答えろ！」

「フフツ。何時の間にか知恵の巡りが良くなっているな。だが、私はどの国にも属さない。従うべきは、私の思考と力だけだ。」

ルークは、左の指先に歯を立てた。

「だが、二つ目の命令には何時か従ってやる。」

そう言つとルークは再び背中を向けた。

「待つ……」

「いい加減にしろ！」

ランクが口を開きかけたので言わせる前に言つてやった。

「私は、貴様のお守りをする気など、爪の先程もない！」

ランクはぐうの音もださなかった。

「シュラー。帆を広げる。」

シュラーは、素直に従ってくれた。ルークとランクを天秤に掛ければ当然、ルークに傾く。

ルークは、帆が広がりきる前に翼で烈風をぶつけた。船は風に押され、凄まじい速さで沖へ後退して行く。

「さて。」

ルークは、船に向けて放たれた矢を一つ残らず叩き落した。

「狩りだ。」

ルークは噛み切った指先の血を自分の影に落とした。

21話 影使い

「契約だ。力を貸せ。」

ルークは、自分の影に血を垂らした。

血は、地面に染みを作る事無く影に吸い込まれ、影に波を立てた。

「ん？」

しかし、反応が無い。影に立った波は、穏やかに静まっていた。

「答える！」

『痛っ！』

ルークが自分の影にドラゴンクロウを当てた。すると、耳元で気紛れで聴こえてくる声が聞こえた。

『何か用か』

「契約だ。力を貸せ。」

気紛れの声が惚けるので、もう一度同じことを言ってみよう。

『やっと、認めたわけだ』

「誰が、貴様など……。」「

『それが、ここまで毒を抑えてきた者に対しての言葉か。私が存在

しなかったら、今頃、そこで寝そべっているところだと思うんだが？　とうだ？』

こいつの言う事はいちいち癪に触る。だが、否定するとどんな言葉をかけられるか。

「お前の好きな狩だ。」

何を言っても無駄そうなので、敵に向き直った。

屋の攻撃は、まだ続くらしくまた数本の矢が飛んで来た。飛び交っているそのうちの一本を、ルークは掴んだ。

『ほう。こんな棒っ切れを私に向けるとは……。馬鹿な獲物だ』

気紛れの声は、口の周りを舐めたようだ。

様だというのは、声しか聞こえないからだ。

ついでに言うと、こいつは影と寒さを司る龍らしい。自称だからその点の真偽は分からないが。

『あまり美味そうじゃないの』

狩りと血が好きな危ない奴だが、慣れれば頭が良く巡り、雰囲気を読める。

追い出そうと思えば、追い出せる。が、気に入っているという訳ではないが、話し相手がなくなるのは寂しい。

『で、何を渡す』

「何でも良い。好きにしろ。」

奴が言っている事は代償の事だ。以前にも使わせてもらった事がある。その時は炎の力の半分だった。お陰で炎技の威力は初めの半分以下になってしまったが大して支障は無い。

元々、炎は合わなかったみたいだ。

『ならば、残りの炎の力。全てだな。炎は好かん。』

人の考えもこいつには手に取るように分かるらしい。

「火が楽に起こせる程度には残して欲しいものだが。」

『くふ。冗談を』

遠慮する気は毛頭無いらしい。

『ぬし、私を追い出せなくなるがよいのか?』

「追い出したかったら、とつくに追い出している。」

『くふ。それもそうだな。で、如何する?』

如何するというのは狩りの事だ。どれから狩っていくか。

「先ずは、飛び道具を潰す。」

一通り会話が終わると、ルークは影に手を入れた。

「弓を借りるぞ。」

手を引き出すと、黒い光沢があり美しい湾曲を描く弓を手にして

いた。勿論、影をドラゴンの力で纏め上げた唯一無二の一品だ。弦も強靱な影で出来ていて、物理的な攻撃では切ることは出来ない。

『素手で私の影の長弓を扱おうなど。腕が引き裂かれるのがおちだ』
シャドーアーチェリー

「一回撃てれば十分だ。」

そう言つて、弦を引く。すると黒い矢が出現した。

弓兵は、様子見の様だ。だが、何時でも撃てるように矢を番^{つが}えているのが音で分かる。

だが、此方状況は変わった。即座に、飛びかう。

「射ろ。」

敵の手から矢が放たれたと同時にルークは弦から手を離れた。

漆黒の矢は、手を離れると同時に分散し、敵の矢を一つ残らず潰した。それでも止まらず、敵の構えている弓の弦を切った。

弦を切った弓矢など、ただの曲がった棒だ。

「っー！」

ルークはそれを確認せず、蹲った。右腕から血がぼたぼたと落ちてくる。反動で腕が裂かれたと言うより、挟まれた感じた。

『私の言うことを聞かぬからだ』

「う、うるさい。だったら、傷を治せ……。」

『覆って動かせるようには出来るが』

そう聞こえ、影が右腕を覆った。

『もう、弓は使えぬな』

と、声は面白そうに言った。

「もう、いい。弓は使わん。」

そう言つて、片手を前に出すと、ドラゴンスピーヤーを構えた。切っ先は鋭く、刀身は、通常の剣より、少し厚い。

ランクには、黒っぽい紫と言つたが、実際は、殆ど黒で濃い藍色と表現したほうがしっくりくるかもしれない。

その切っ先を影に当てると、影が蔓のように巻き付いた。

「奴らに、狩りのやり方を教えてやろう。」

『くふ。面白そう。よい考え』

声は、一旦間を開けた。ルークはその間に、敵の配置を探った。

『行くかの』

「お前が言つな。」

ルークは廃墟となつた、港から足を出した。

22話 戦場の前夜（前書き）

二話ほどルークから話はずれ、忘れていたこの話を書きます。

カイナル「忘れていた!？」

ハミネ「どういうことか。」

ケルト「説明してもらっぞ。」

よりによって怖い三人来たー（汗）

カイナル・ハミネ・ケルト『さあ!』

すみませーん! ↑逃

22話 戦場の前夜

ルークがホーエイムへ侵入した日、王国連合軍とホーエイム軍の前線は全勢力を掛けて衝突していた。

所謂、全面戦争だ。

戦況はホーエイム軍を迎え打ち形と成り、防御を重視した形となっている。所謂、籠城だ。戦争では防戦が有利となる。護る城は無いが、どんな状況下でもいえることだ。

だが、苦戦していないわけではない。

戦場では、攻めは護りの三倍の戦力が必要と言われているが、ホーエイム軍の勢力は、此方の約二・六倍。ぎりぎりの攻防なのだ。

さらに、主要戦力の要である、アルとユシールは負傷してとても戦える状態ではない。

実質は、ホーエイムのほうに分があるのだ。

数度の、衝突があつた後にやって来た夜。雲は少なく、鎌の様な三日月が浮かんでいた。

「さて、徹底的に潰しましょうか。」

「おう！」

「愉しくなりそうね。」

ホーエイム王国、キースの呼び掛けに応えるポケモンは二人。グランブルとユキメノコ。この三人はホーエイム王国で最も戦闘力に長けている通称ホーエイム三将。

その後方には、開けた土地にいくつもの野営地や、陣幕、櫓がある。そこには、ホーエイム王国の動かせる全勢力が集まっている。

ここで、終焉^{おわり}せようとしているのだ。

「でもよう。キール。お前、散々やられて帰って来てたじゃねえか。俺が指揮した方が良くないじゃねえか」

グランブルが、がはと大笑いしているのを、二人は横目で観ていた。

「馬鹿に何が出来るんだか……。」

暫くして、呆れるのを乗り越して哀れむような目で、ユキメノコが小さく言った。

「何だとテメエ……」

「事実でしょう。」

ユキメノコが指差してみた方には苦笑いを浮かべるしかないホーイム皇国の隊士がいた。隊士達はそれに気が付くと、そくそくと仕事に戻った。

言葉で嘘は言えても表情は変えられないらしい。

「出るのは明日だ。」

そんなやり取りを全く無視して、キールが立ち上がった。

「これは聖戦だ。」

島の北側、三分の二の領土を取り戻したナーリアを始めとするシ
ュロ、サス、カトラルは、陣営を横へ広げ、更に木を使った防壁を
築き、その後ろに陣を張る。

戦は常に、攻めと守りが存在する。無ければ、もみくちゃになり
両者全滅と言う事もあり得るからだ。

此方は、二名の指揮官が戦闘不能となっている。この場にいない
指揮官など死んだも同然で、その隊は再編成を求められる。

それに手間取っているのは、三流の証だ。そこは、数分で編
成する。

「不安だ。」

カイナルは、不安になった。通常より、三十名ほど多くなった隊
を一人で抱えるのはやはり不安がある。

「戦場での再編成など、当たり前前に起こる。指揮官がそんな顔をし
ていれば不安が伝染する。いつも通り振舞えば良い。」

カイナルの頭にドンと手が載せられた。

ハクは、直ぐにその手を退けると、颯爽と出て行ってしまった。

「ま、気楽にしろよ。今日はもう来ないだろ。」

「お前は逆に気を張れ。」

ファラルスの言葉に友人と言うケルトが忠告をする。

「馬っ鹿じゃないの。」

ハミネが、陣幕の奥から、睨んでくる。

「一人でも、戦力は欲しい。抜けられると困る。それに……」

同じくラークが奥から覗く。

「信用はどの世界でも大切だからね。」

そう言つと、商人家計らしく蠟燭が勿体無いと言つて火を消した。カイナルは、その意味が解らずに、月明かりの入る陣営の中、一人立ちすくしていた。

23話 衝突（前書き）

文がおかしいところや分かり難い場所があるかもしれません。

済みません。

23話 衝突

交戦は夜明けと共に始まった。

その時見張りをしていたサス貴国の隊が、ホーエイム軍の急襲にいち早く反応し前線で争っている。

そこで、カトラル、シルイ隊と、セナ隊を左右に展開させ、挟み撃ちにする策をとった。

残りはサス貴国に加わる形状かたちで迎え撃つ。

対する、ホーエイム軍は戦いに関する知識が全くなくても分かるくらいの攻めの形状かたち、尖塔だ。

一点を集中的に攻撃し、突破口を作り出すという一般的な策だ。

「信用……。」

カイナルはまだ考えていた。

カトラルは、確かに、商人の国で、商売は信用の元に成り立つと聞いた。

だが、それが今役に立つのか分からない。

「おい。確りしろ。」

ボーっと進んでいたせいで後ろにいるケルトに声をかけられた。

「気を抜くと、死ぬぞ。」

そう言って、ケルトはサッと飛び出し、あっという間に戦場に消えた。

カイナルも、とび来む。

戦況は芳しくない。幾ら守りが有利だと言ったって数を出されてはそれさえ覆される。

苦戦を感じたカイナルは、敵を倒しながらケルトに近付いていた。

「な、なあ……。」

「誰だ！」

振り向いたケルトは既に何人倒したのか分からない位、返り血が付いている。

呼び掛けた時も、防具の僅かな隙間から、頭の鎌で敵の腹を切り裂いていた。

ケルトは、声の主がカイナルだと分かったと、一層険悪な顔になった。

怒っている。

「貴様！ 何故ここにいる！ 他の奴等はどうした！」

そう怒鳴りながら、また一人、倒した。

「あ、ああ。まだ戦っている。」

「指示は、出しただろうな。」

あ、つとカイナルは黙った。

「貴様……。おいっ！ そのの。このまま参戦してハクの指示を仰げ！ 俺は、こいつに用が出来た！」

ケルトの近くにいた隊士は頷くと、目の前の敵を倒し、ケルトの指示を仲間に伝えに走った。

「こいつ」

ケルトはカイナルを引き連れ、カイナルの任された隊のいる場に走った。

「アイク！」

一声掛けると、空から、ピジョンが降りてくる。

「こいつの隊の者に伝えろ！ 一度引き返して隊を別け挟み撃ちにしろ！ こいつは俺が引き受ける！」

「はっ。」

アイクと呼ばれたピジョンは飛び立っていった。

ケルトは、カイナルに向き直った。

「貴様！ 仲間を見殺しにする気だったのか！」

ケルトは、凄い形相で睨んでくる。

「指揮官を失った隊がどうなるか位考えられるだろ！ 貴様は、それ程の知識も無かったのか！」

「っ……」

命令系統が消えれば軍隊はただの烏合の衆だ。それを狙わない鷹はいない。

「ナーリアで見た時はもう少しやると思っていたのだが……」

ケルトは、カイナルを置いて後ろを向いた。

戦場に戻ろうとしている。

「まっ——」

「戦場に戻りたければ、それなりの覚悟は持て。そして、信用を失うな。次に同じ事になったら、俺はお前を信用しない。」

そう言われて、気が付いた。

信じられない者に、物は売らない。信じられない者に、情報は与えない。そして、信じられない者には、誰も付いて来ない。

カイナルは自分のいるべき場所へ戻った。

受け入れてくれるか心配だったが、隊士達はカイナルが来た事で心強そうにしている。

「皆！ オレを信じてくれ。」

カイナルが作戦を告げると、隊士達は応えた。勿論、賛成の方へ。やはり、最も信じられるのは彼らしい。

「行くぞっ！」

カイナルが、大声で言うのと隊士達は雄叫びを上げた。

23話 衝突（後書き）

次回、カイナルの作戦とは！？

ケルトとの関係は戻るのか！？

24話 神の意思と愚民の反抗？

カイナルは、自らの隊を敵の進軍している前に置いた。

「行くぞっ！」

作戦とは、よく言えたものだ。

カイナルの策は、敵の列を砕き、道を開け、以前目撃した、あのハッサムを倒すということだ。

我ながら、良く付いて来てくれたと思う。

「うおおー！」

カイナルが、敵の中に飛び込むのを護るように隊士達が周りを囲み、カイナルを導いていく。

行ける。そう思った瞬間、目の前に矢が飛んできた。予想外の攻撃に避ける事が出来ない。

とつさに目を瞑ったが、矢が当たる気配は無い。

「全く、世話の焼ける指揮官だ。」

目を開けると、防具に包まれているケルトの姿があった。口には矢を咥えている。

「まあ、自分から飛び出して行った事には感心するが。もう少し、やり方があるだろう。」

皮肉めいた事を言っではいるが、顔は笑っている。

「やるなら、下準備をしておいてからの方がいいな。」

そう言ってケルトは振り向く。吊られて見ると、ケルトの指揮する隊によって十分な通り道が出来ていた。

黒い塊が飛び上がったと思ったら落ちていく。

よく見るとそれは、ホーエイム皇国の紋が描いてあり、その中央にはファラルスが居た。

「ハッハッハ！ 軽い軽い！」

ファラルスは恐らく、カトラルで最も力のある者の一人だ。そんなファラルスに投げ飛ばされたら一溜まりもない。

「よう。」

ファラルスは声の方を向いた。

そこには、ファラルスと同じか、それ以上の大男。グランブルが、立っていた。

「俺様は、ゴードン。俺様と力比べしようぜ。」

そう言い、ゴードンと名乗るグランブルは、飛びかかってきた。
ファラルスは、それを迎え撃つ。

「うおおおお！」

ガシツと手の平を合わせ、押し合う。
技は使わない。

それは、暗黙の内の二人の誇りだ。
技を使うのは卑怯者だ。

「なかなか、やるじゃねえか……」

ゴードンは力を入れ直した。

「当たり前…前だ……」

ファラルスも、負けじとそれ以上の力をだす。
この力比べは、暫く終わりそうになかった。

リトルナは、ユキメノコと対峙していた。
彼女は氷タイプなのかと疑うくらい、頭から湯気が出るほど怒っていた。その理由は、

「ホント、こんな事で怒るなんて、全く色気が無いわね。」

ユキメノコ、リアビラスの言葉だった。

「何なのその肌。日焼けのつもり？ そんなわけ無いわよね。アンタみたいなのが、浜辺で寝そべってたら、皆避けてくわよね。」

「黙れ！ アンタみたいな幽霊に言われたくないわ。オバサン」

最早、戦時中だという事を二人とも忘れている。

リトルナの部下が話をしようと近付いたら、逆にリトルナにボコボコニされ帰ってきたという話だ。

「そんな、いやらしい目をしてたら男なんて寄って来ないものね。ああ、可哀想に。」

リトルナは、今までの鬱憤を全て吐き出すように毒舌を吐いた。

「それに、アタシには国王様がいるから良いのよ！ 他にも良い男がいっぱい居るわよ。それに比べて、アンタの周りには汚らしい男たち、ああ、可哀想に。」

リトルナは同じ事を何度も繰り返している。

「でも、その国王サマは、何でもこんな事しているのかしら？ アタシ達に勝ち目なんてコレッポッチも無いのに。あーあ。もっと頭が切れるのかと思ってたけど残念ね。」

リアビラスは指でほんの少しだけ隙間を作って見せつけた。

「っ！ もう怒ったわ！ ラーク様を侮辱するなんて！」

「じゃあ、殺し合いでもする？」

「望むところよ！ アンタなんて氷付けにして海に流してやるわ！」

「じゃあ、アタシは、氷付けにして山に捨ててきましようかね！」

二人は、触れば凍り付きそうなくらいの剣幕で睨みあった。

「うおっ！」

カイナルはキールのシザークロスを避けた。

そのまま、後ろに回りこみアクアテールをぶつける。

キールは、自身の勢いとアクアテールの衝撃で前に飛ばされた。

「おっしやあ！」

「一々、五月蠅い。静かに戦えないのか。」

ケルトがカイナルの横へ走ってた第一声がこれだ。

「静かにつてどうやるんだよ」

「こうするんだ。」

ケルトは、パツとカイナルの前に飛び出て、キールのはさみギロチンを辻斬りで受け止めた。

ケルトは頭を振って、払いのける。

「大体、こんな物が止められた位で喜ぶな。奴は、五割も出してない。」

キールは、ゆっくりと起き上がった。

「流石、とでも言っておこう。」

「此方としては、そんな言葉は掛けられたくないんだがね。こいつが図に乗るんでね。」

そう言つてケルトはカイナルを顎で指した。

「ハッハッハッ。出来の悪い弟子を持ったものだ。」

ケルトは答えない。相手の出方を伺っている。

「まあ良い。これは聖戦だ。俺は神に従う。」

「あんた等の神様はよっぽど偉いんだな。」

カイナルが言つと、キールは意外そうな顔を見せた。

そして、カイナルは無視してケルトに向かった。

「お前の弟子は礼儀を知らないらしい。」

「誰が、弟子だ！」

カイナルが怒鳴ると、キールはケルトに哀れむ目を向けた。
仕方なく。という感じでケルトが口を開いた。

「全くだ。危なっかしい事ばかりしでかすものでな。俺はそのお守りだ。」

キールは、興味が無さそうに聞いていた。

「で、さっきの続きだが……」

と言って、キールが消えた。と見えた時ケルトは空中に投げ出されていった。

「俺の神に逆らうならば殺す。」

キールの目は今まで出会ったどんな人よりも黒く沈んでいた。

24話 神の意思と愚民の反抗？（後書き）

えー、？と書きましたが次回から話がまたルークに戻ります

25話 狩り

「さて、誰から狩るかな。」

ルークは、ドラゴンスピヤーの切っ先を上げた。

『ぬしょ。もっと、楽しむ気は無いのかや?』

声の問いにルークはすぐに答えた。

「それも良いな。」

右手の物を真横に突き刺すと、飛び掛かってきた敵の腹に切っ先が突き刺さった。

「だが、早く終わらせたいたい。」

ルークは、答えると敵に向き直った。

「戦場に行って入れば、もう少し長く生きられたかもしれないからね。」

そう言って、甲冑ごと縦に切り裂いた。ドラゴンスピヤーは、刺す事は勿論だが、斬る事の方が向いている。上手く使えば岩など綺麗に真っ二つに出来る。

ルークは、振り上げたドラゴンスピヤーを元に位置に戻すと、頭を下げた。

そこを、二対の冷凍ビームが左右から通り抜ける。

ルークは冷凍ビームが来た方向に向かってドラゴンスピヤーを投げた。

それは一直線に飛んで行き、見えない敵の倒れた音が聞こえた。

「やっぱり、逆方向にも刃が伸びているせいで使い難いな。」

二本の剣の鐔を取り、柄を合わせた様な形のドラゴンスピヤーは、後方、つまり自分側に伸びている刃が引掛かりやすい。

これが、自分の手足の様に使えるようになるには五年かかると言われているほどだ。ルークは使えるようになってから、まだ三年程しかたっていない。しかも、その時には既に扱い方を教えてくれる者はだれ一人いなかった。

記憶と勘だけでここまで使えるようになったのだ。

『ならばぬしよ。使うのをやめればよからう』

「丸腰になれという事か？」

『おお、そうじゃな。まあ、頑張る事だ』

また適当な事を言い出す。

「お前……。狩りしたいだけなんじゃないか。」

『ふむ。このような血だらけの姿だ。憐れむなと言う方が無茶だな』

「だったら、せめて――」

ルークは降り降ろされた刀を受け止めた。
そのまま力押しで跳ね返す。

「私の体が壊れない様に……！」

言いかけて、地面に崩れこんだ。

全身にひどい痛みがまわる。息が苦しい。

『うむ。そうしたいのは山々なんじゃが……』

声の主の顔がどこか別の方を向いた気がした。

『済まぬ。限界が近いらしい』

ルークは、再び降ろされた刀を地面を転がって避けその刀を持った腕を串刺しにしてやった。

「そういう事は……」

早く言え。そう言おうとした時足が崩れた。

体が、いう事を聞かない。散々無理をさせた反動がいま来たらしい。

敵は、あと二人。

横からのぶつり攻撃を体を捻って避け、重力に任せドラゴンスピヤーを振り降ろす。

元々軽いドラゴンスピヤーだが、腕の重さもあってか、敵を貫いた。引き抜く事は出来ない。むせ返るような血の臭いが鼻を突く。

もう一人はと顔を上げた時、嫌な気配がして、逆手のドラゴンスピヤーを背中にあわす。

カッと硬い音がして、敵の刃を弾き飛ばす。が、右肩から左の脇腹辺りまで傷が入ったのが分かった。

その状態から、ドラゴンスピヤーを後ろに突き出し、敵の胸のす

ぐ下辺りに刃を入れる。

背中に重い物が被さり、生暖かい赤い液体が足元に広がった。

「ハア。ハア」

自分の上にある重い体から、何とか全身を抜き出し、今まで使っていた武器を杖代わりに立ち上がる。

鉛になったかのように重い体を引きずりながら、誰も居ないと分かっているのに港まで進んでいく。

頭では無駄だと分かっているが、体がまだ生きようとしている。こんなにも、生きたいのかと心の中で微笑いを浮かべた。

「大丈夫かー。」

だが、そんな事も驚きに変わってしまった。

「その体でまだ動けるなんて、驚いたね。」

緑色の体に赤い腹。腰にはホーエイム皇国の印がついた革の鞆。

「ナーハルもそう思うだろ。」

「そんな事、あんたが考えれば良いでしょ。」

港の栈橋の先にいた二人。

それは、ライガとナーハルだった。

25話 狩り（後書き）

くお知らせく

第五章孤高の戦士が終わったらまた人気キャラ投票をやってみたいと思いますので、よろしくお願いします！

因みに、国でも技でも食べ物でも何でも構いません。

また、一位のキャラ（ルーク以外）には短編も書きたいと思います。

以上、砂漠の蜻蛉からでした。

26話 戦いの真実

ライガは、近付いてきた。

ルークはとつさにドラゴンスピヤーの切っ先を向けたが攻撃範囲に入る直前で立ち止まった。

「ぬかりは無いんでね。」

ライガはそう言つて笑った。

「さて、まず礼からだな。役目を果たした。感謝するぞ。」

「どういう…意味だ……」

ルークは一步前に出たが、ライガはその分後ろに下がる。

「お前のおかげで、俺の思い通りに事が運べた。まあ、仕事を増やしてくれた事に関しては感謝しないがな。一思いに殺してくれれば仕事が楽なのに。」

ライガはルークのはるか後方で倒れている兵士たちに目を向けた。急所は外しておいたが、虫の息なのは確かだろう。

しかし、それよりも興味をそそる言葉がある。

「貴様の…思い通り……だと。」

「そう。俺はこの反吐が出るような国を潰したかった。そこで、利用させて貰った。」

ライガは後ろにいるナーハルの所まで戻り、彼女の肩を叩いた。

「こいつは、この国のしでかした事の被害者だ。」

肩を叩かれたナーハルは、そっぽを向いた。

「俺の名。覚えてるか。」

「リュビッセ・ライガ・セイーフ。」

一字一句、発音まで正しく言っただった。
それが何の関係があるんだ。

「ご名答。」

ライガは、やる気の無い拍手を二、三度し、向き直った。

「じゃあ、ここからが問題。今現在、この国を治めている形式だけの最高権力者の名は何でしょうか？」

ルークは、数少ないこの国に関する記憶を洗いざらい探し出した。
分からない。記憶に無い。

「時間切れ。正解は、リュビッセ・ガビッツ・セイーフ。俺の馬鹿弟だ。」

ルークは再び目を見開いた。

下の兄弟が、上の肉親の暴挙を憎み、反逆する事はあるが、その逆はまず無い。何故なら、王政国家は兄弟の場合年齢順に王の着任権を持つからだ。

弟が王で、兄が下働きなどまず起こらない。

ライガはそんなルークの考えはお見通しで話を続けた。

「お前も、一応、一国の王弟だったんだ。異常さは分かるだろ。俺はな、まだ小さい時にこの国の本当の姿を知ったんだよ。整えられた箱庭じゃなく、誰も手入れしない密林をな。」

そこまで話し終わってから、ナーハルが口を開いた。

「当時のこの国の税率は稼ぎの六割。戦時中は八割にもなったわ。勿論、国民は餓死するか、債務兵になって戦場に狩り出され。それ以外は奴隷にされてどこかに売り飛ばされた。」

勿論、あたしも生活に困って盗みで生活してたわ。そこに現れたのは、当時の皇王に税率を下げるように申し立てて家臣からの反感を受け、馬鹿みたいに町に放り出されたこいつってわけ。」

「馬鹿じゃ無い。助ける為だ。」

「あつそう。で、こいつがまた馬鹿であたしを捕まえて国に突き出すと思ったら、『俺と一緒にこの国を潰さないか』って。その時の顔と言ったら……。今思い出しても笑えるわ」

ナーハルは、そのときのライガの顔を思い出したのか笑っていた。

「そこで、俺達は国の内通者として、ガレンとナーリアに潜り込んだ。そこで、お前の登場だ。直ぐに使えと思った。その時にはこの皇王の座を狙っていたヒバタは混乱に乗じるこの戦争を企てていた。」

「なに……」

そんな下らない理由で来たの小国群を巻き込んだのか。

「俺は、それをそのまま利用させてもらったんだよ。小国だけではすぐに負ける。だから、カトラルも巻き込むよう仕向けた。それに、ナーリアにこの国が先手を打ってきた事を気付かせた。

そして最後に、お前がこの戦いに何としてでも入り込みこの国へ来なければならぬ状況を作り出した。

ここまですれば、後はお前が皇王と大司祭を殺して終わりという結末だった筈なんだが、招く客を間違えていたらしい。邪魔をした。

」

ランクの事だというのはすぐに分かる。

『のう、ぬしよ』

このタイミングで声が聞こえた。「何だ。」と心の中で呟くと話を続けた。

『よもや、ここまで利用されておいて、黙っておるわけはないよの』

勿論だ。私を利用するならそれなりの代償を払ってもらわなければ。

「話は、分かった……。」

ルークは、体重を少し後ろに掛け、体を起こした。

「だが、もう一人の方は、大分怒ってるみたいだな。貴様らを海に沈めたいと言っている。」

左手の指の間に、二本ドラゴンスピヤーを挟み、後ろへ一振りする。

「だから、私もそれに従ってやる。」

ナーハルがいち早く反応しライガの前に立つ。
ルークはそれ目掛けて槍を飛ばした。

「ガッ……」

ナーハルは一本目を叩き落としていた。だが、ドラゴンスピヤーは二本投げた。

もう一本は、背中側に振った時はもう手元になく空中を回転しながら飛んでいた。刃の形を変えておいたそれは、ブーメランのように手元に戻ろうと弧を描き、ナーハルの背中に突き刺さったのだ。

ナーハルは、体をくの字に曲げ、栈橋の木の板の上に崩れ落ちた。

「これで、ゆつくり、狩れるな。」

ルークは笑った。

だが、その顔は何処までも黒く冷たい冬の夜のような笑みだった。

27話 孤独の海へ

ルークは一步前に出た。

ライガはもう退かない。ドラゴンスピヤーの攻撃範囲は予想を遥かに超えていたからだ。

栈橋ではその範囲から出る事は不可能だ。

ライガは、困ったというふうに肩を竦めた。

「ナーハル。もういいぞ。」

ライガが、そう一声掛ける。すると、頭のすぐ後ろに熱風が鋭く吹きぬけた。

「長い」

「悪かったな。」

ルークはその強力な蹴りを避け、切っ先を振り上げたが、ナーハルは着地と同時に方向転換をしルークの真後ろに立った。

先程、ドラゴンスピヤーを突き刺した方は、ライガが作り出した身代りだった。器用な事だ。

『ぬし。そこをどけ』

声と同時に、ナーハルのブレイズキックが顔を掠める。

「何だ!？」

『そこを退けと言っておる』

「何を言って……」

ナーハルが再び顔めがけてブレイズキックを繰り出した。
ルークは、後ろに跳び下がった。

『ぬし。はよせい』

「五月蠅いつ！」

ナーハルのマッハパンチをドラゴンスピヤーで受け止めた。

『もう、見ておれん』

「!？」

ナーハルは跳び下がった。そして、凍りついた足を不思議そうに見る。

「凍れ。」

ルークがドラゴンスピヤーの先を向け一言いうと、その氷が更に
ナーハルを包み込む。

「クッ。何なの？」

「全く、こんなにボロボロで強がりおつて。その狐共にに教えて
おこつ。私の司る物は、無機質な影だけではありません」

ルークは氷を割ろうとしている、ナーハルに切っ先を当てた。

ナーハルは動けない。

「もう一つは『寒さ』。狐ら、私の力からは逃れられぬ」

不意に、風を感じ横へ跳び退ける。ライガが、リーフブレードで首を狙ってきた。

「おい。さつさと氷割れよな。ケツデカ女」

「何だつて！」

ナーハルが、氷を無理やり割ってライガに突っ掛かった。

「アンタねえ」

「シャドークロー
影の大爪」

言い争っている二人の影から、二本の大きな爪が伸びた。片刃で薄い剣の様な爪だ。

それが、二人を挟むように閉じた。

ガチンという音がして爪が十字に交わる。

「話の邪魔をするな」

「獲物に感情移入すると狩など出来ぬからの」

そう言って、すかさず足元を凍らせる。

「さて、一人」

反応が、少し遅れたナーハルに影の大爪が斬りかかる。シャドークロー

爪は腹を仕留め、ナーハルは棧橋の外へ弾き出された。そして、ボロボロの石畳に落ち動きが止まった。

刹那、ライガのリーフブレードが硬い音を立てて止まった。止めたのは、漆黒の刃を持つ、影の剣。逆手に持ったそれをライガの顎を狙って振り上げる。

ライガは、それを避け距離をとった。右耳の下からは血が滴る。

「お前は。誰だ」

ライガは、ボロボロで機敏な動きが出来るはずも無いルークを見た。

「ぬしに名乗る価値はありんせん」

ルークがライガに飛び掛る。ライガは、見えないように針を抜いた。

「！」

二人の動きが止まった。ルークの背中にはライガの針が深く刺さっている。

「チッ。折角解毒してやろうと思ったのによ」

ライガは、針を抜きその反動でルークは海に落ちた。ルークは手を伸ばしたがそれは空を掴んで消えた。

「さようなら。果敢な戦士よ」

ライガは、ナーハルを助け起こした。

ナーハルは、咳を何度かして起き上がった。

「行くぞ。この国はもう潰せた。」

「行くつて。何処に？」

ライガは、遠くを見つめた。

「東に。面白い物がありそうだからな。」

体が重い。海面はどんどん遠くなっていく。傷口からは血と一緒に生気も流れ出ていく様だ。

『ぬしよ』

声が、聞こえた。

『済まなかった』

お前が、私の中にいるのなら、言いたい事が分かるだろ。と言ってやりたかった。

『こうなったのも、私の責任じゃ。ぬしには生き延びてほしい』

声は、一瞬黙った。今にも走馬灯が走りそうだ。

『ぬしに私の力を全て渡す』

ゴボツと口から空気が漏れた。

なにを言っているんだ。こいつは。

『私の力があれば、影の中を行き来出来る。それならばここから逃げ傷を癒せる』

「（それで、お前はどうなる？）」

やっと返ってきた言葉に、声は戸惑った。

『消滅^きえるかも知れぬ。じゃが、ぬしが生きられるのならばそれでもよい』

そんな事、了承するわけが無い。

「（駄目だ。その代わり、私の望みを叶えろ）」

ルークは声に自分の考えを全て伝えた。再び声が戸惑った声を出す。

『ぬし、本当によいのか？ もう、あ奴とも逢えぬかも知れぬぞ』

「（良い。最後に、お前の名は？）」

『私は、獲物には名を教えぬが特別じゃ。私の名はイアヌ。北の氷^{ひょう}龍^{りゅう}イアヌとは他ならぬ私の事よ』

ルークは、心の中で笑った。イアヌが胸を張ったのが分かった気がしたからだ。

『用意はよいかの？』

ルークは心の中で頷いた。

27話 孤独の海へ（後書き）

次回。戦いは終焉を向かえ……

28話 神の意思と愚民の反抗？

シンと静まり返った戦場は、気のせいだった。
キールの攻撃が速すぎてそれに集中しないと腹に穴が開きそうだったからだ。

「ハッ！」

キールの攻撃を避けそこないそうになったカイナルは、ケルトの鎌に助けられた。

シザークロスを受け止めたケルトの鎌は震えている。力の均衡はいつ崩れるか分からない。

バンツという音と共にケルトとキールが引き離された。互角の样だ。

ケルトは間髪入れずにかまいたちを放つ。

しかし、空気の刃はキールのメタルクローで粉碎された。

「うおおおっ！」

カイナルは、息んで冷凍ビームを撃った。

キールはそれを一跳で、跳び越え後ろに下がる。二人は息を切らしていたがキールは涼しい顔をしていた。

「よく頑張ったな。無理に神に抗^{あらが}う必要は無い」

「神、神、五月蠅いんだよ」

カイナルがキールを挑発するが、全く揺るがない。

「まあ、いい。神を理解しようとしないう民共だ。哀れみすら感じる」

そう言つてキールが後ろを向く。

その視線の先には、ピジヨットが凄まじい速さで飛んできていた。そのピジヨットはキールのすぐ近くに着地した。

「報告します。南西二十里ほどに船団を確認。」

それを聞いて、キールが笑つた。

「これで、終幕だ……？」

しかしキールは途中から別の場所を見ていた。報せしらせを運んで来たピジヨットだ。

「それが……」

「何だ！ 早く言え！」

キールの覇気に圧されピジヨットが口を開いた。

「それが……。船はガレン王国の旗を揚げています」

ピジヨットの顔は汗が流れている。飛んで来た事によるものではない。緊張と恐怖からなる汗だ。

「な……」

「今更かよ」

「如何やら、神はお前達を見放したらしいな」

カイナルに続きケルトも言い放った。

すると、今度は別の方角からもう一人、ピジヨットが飛んで来た。

「何だっ！」

キールが怒鳴ると、ピジヨットは持ってきた紙を広げ高々に読み上げた。

「本国より通達。至急、全軍を撤退させよのこと。以後の侵攻は全て中止」

それを聞いた途端、キールは紙を引つたくり、穴が開くほど睨みつけた。

裏側からでも、強く押されたホーエイム皇国の印が覗える。

「くそつ。全軍、直ちに船にもどれ！これ以上の戦いは無用だ！」

キールは悪態をつくと大声で怒鳴った。

暫くして、踏み潰された陣営や、崩れた櫓などが崩れる音以外何も聞こえなくなった。

「勝った……？」

カイナルは、呆然とそれを見ながら呟いた。横を見るとケルトが苦笑いを浮かべている。

「勝ったぞー！」

カイナルの雄叫びと共に、味方全員が喜びと祝福の声を上げた。

28話 神の意思と愚民の反抗？（後書き）

次回、戦火が消えたガレン王国に……

最終話 平和と奇跡と夏風と

戦争は戦っている最中よりも、終わってからの方が忙しい。

お互い調整を取りながら国としての機能を取り戻しながら、戦時賠償等を決める会合などを開かなくてはならない。戦争に金が掛かる理由の一つはこれだ。

幸にも、此方には交渉の達人がいたので会合は円滑に進み、一週間で全てが終了した。

ナーリア王国には賠償金として、金貨二万枚とバイル島復興の為に必要な物資の無償提供を。サス貴国には同じく金貨二万枚。カトル王国には二千枚。ガレン王国は千枚ということになった。

そして、ホーエイム皇国は王政を廃止しホーエイム聖国と名を変えた。

後で知った事だが、この戦いを裏で糸を引いていた、リーフことライガの思惑通りになったのだ。

それを知ったガルは哀しそうに見えたが、すぐに元通りの生活に戻った。

しかし、この戦いで命を落とした者は帰ってくるわけではない。ただの、誰ひとりも。

結局、ランクの英雄は帰って来ることはなかった。

知り合いの国王は、英雄の葬儀はいらないと言ったのだ。

確かに、このままの方が良いのかも知れない。

それから三年後、開け放った窓から暑い夏風が入ってくる。

丁度、このくらいに始まった戦火の傷は癒え、普段通りのんびりした日々が続く。

ランクは、真っ白な羽根ペンを手にしていた。日記をつけるようにしたのだ。

英雄に助けられた命の存在を示すためだ。

ランクはまたすこし大きくなった。もう少しで進化出来るかと淡い期待を抱いている。

ランクは「ふう」と溜め息をついて目の前の壁を見た。

壁には、薄汚い油紙が掛かっている。

二年前にシグラが見つけたてきてくれたのだ。

油紙には、紅い字で『この戦いの後^{のち}に我の望む世界を』と書かれている。

字は細く鋭く美しい。ずっと見ていたくなるが、この字は血で書かれている。

英雄がいつの間にか書いていたのだ。

これを見ると必ず思い出す。

何の理由で戦うのか。

戦うのが好きなのか、何かの代償か、その先に何かあるのか。

ランクはいくら考えても分からなかった。

英雄は恐らく、とっさに逃げ道を作るために言ったのだろうが、永久に出口にたどり着かない迷路に嵌まったようだ。

「はあ」

ランクは思い出した頭を働かせる。

英雄が生きていた証を遺すため。

「お前はどっ思う？」

窓から迷い込んできた雀に尋ねたが雀はピヨンと逃げてしまった。
ランクはそれを目で追った。

雀は飛び立ち窓と反対側の開け放った扉まで飛んだ。

「まだ考えていたのか。呆れるくらいの物好きだな」

奇跡は起こらないと念っていたが、それは全くの勘違いだった。
先程の雀を手の上に載せ、現れた英雄は、苦笑いを浮かべながらも嬉しそうだ。

「久しぶりだな。ランク」

緑色の流線に、美しいオレンジの淵がある翼。抜け目の無い鋭い
眼光は、優しげに光っていた。

「ルーク！」

そこには、ランクの英雄の姿。生きていて欲しいとどんなに願った事か。

抱き着くと、少し血の臭いがするルークの匂い。

「知りたいのなら教えてやろう」

開け放った窓から夏の生気が入り込む。

「答えは……………」

最終話 平和と奇跡と夏風と（後書き）

長い間、ありがとうございました。
これで、お話は終わりです。

では、また新作が出来るまで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0528m/>

孤高の戦士

2010年11月17日03時01分発行